石川県埋蔵文化財情報

第　38　号

巻頭図版（八日市地方遺跡　弓波遺跡　庄・西島遺跡、津波倉廃寺）

平成28年度の発掘調査から …… 調査部長　垣内光次郎 …（1）

発掘調査略報

八日市地方遺跡（小松市）……（4）

梶井衛生センター遺跡（加賀市）……（8）

弓波遺跡（加賀市）……（10）

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市）……（16）

大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市）……（20）

平成28年度下半期の出土品整理作業 ……（22）

調査研究

石川県の長い石鏃について …… 久田正弘 ……（25）

「与野評」刻書平瓶再考 …… 和田龍介 ……（35）

2017年12月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

八日市地方遺跡

A区遠景（南から）

八日市地方遺跡は、ＪＲ小松駅の東側一帯に所在する北陸を代表する弥生時代中期の大規模環濠集落で、周囲に平坦な沖積低地がひろがる水上交通の要衝に位置する。北陸新幹線建設に係る平成28年度発掘調査では、遺跡の北西端（A区）および南西端（D区）にあたる調査区から30基を超える方形周溝墓群を主体とする広大な墓域などを確認した。

A区方形周溝墓（SZ6）作業状況（南から）

遺跡の北西端に位置するA区では、調査区南半に15基程度の方形周溝墓が密集する状況を確認した。方形周溝墓の多くは、周溝の四隅が途切れるものを主体とし、隣接する周溝墓と溝を重複・共有させ、主軸方位を揃えて列状に築造されている。調査区中央東寄りに位置する方形周溝墓（SZ6）は、墳丘長辺が15ｍを超える大型墓で、遺跡内最大級の規模を誇る。

A区 遠景

A区 方形周溝墓（SZ6）作業状況

写真解説

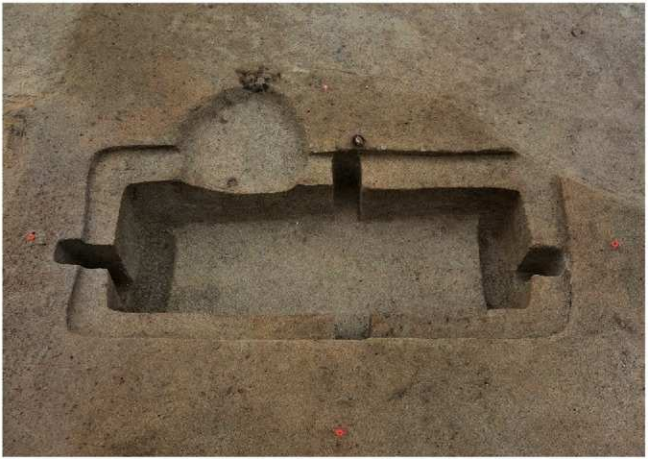
八日市地方遺跡

D区 埋葬施設（SK2、東から）

遺跡の南西端に位置するD区では、調査区のほぼ全域に展開する16基以上の方形周溝墓を検出した。周溝墓の墳丘内部からは、２基の埋葬施設（SK1、SK2）を検出し、両者共に木材を長方形に組合せた棺を用いていることが明らかとなった。

D区 埋葬施設（SK3）赤色顔料検出状況（北から）

調査区北端に位置する方形周溝墓（SZ7）では、周溝内を掘り込み設置された埋葬施設（SK3）を検出した。被葬者の頭位方向と推測される東端付近からは、赤色顔料を確認した。



D区 埋葬施設（SK2）

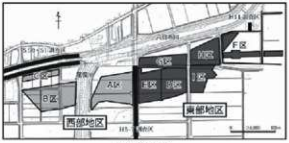
D区 埋葬施設（SK3） 赤色顔料検出状況

写真解説

弓波遺跡

遺跡遠景（南から）

弓波遺跡は、加賀市の北部に位置しており、柴山潟に流れ込む八日市川と尾俣川の合流部周辺に広がる複合遺跡である。北陸新幹線建設等にともなう３万㎡を超える大規模な発掘調査（図参照）により、弥生時代から中世の集落と弥生・古墳時代の墳墓等を確認した。



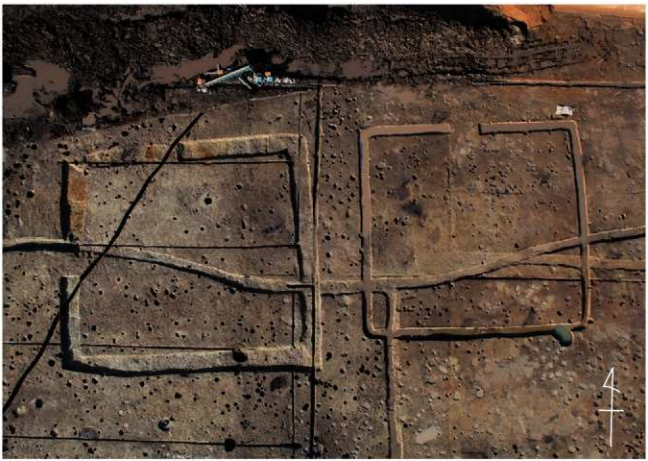
調査区割図

方形区画溝

Ｄ・Ｅ区では、古墳時代前期頃の東西方向に並ぶ方形区画溝を２基確認した。東側の区画溝は一辺25ｍを測り、北辺の中央部が長さ３ｍの陸橋状に掘り残されており、区画内部への出入口とみられる。区画内では中心よりやや南東に位置する１×３間の建物が区画溝と同じ軸にあることから同時期の可能性がある。

西側の区画溝は一辺26ｍで西辺中央に陸橋状の出入口がみられる。区画内では明確な施設などを確認できなかったが、溝からは古墳時代前期頃の土器が大量に出土した。

遺跡遠景



方形区画溝

写真解説

弓波遺跡

方形周溝墓と古墳（北から）

調査区東側では、墳墓等を確認した。Ｉ区では弥生時代後期の方形周溝墓２基（右側と左側）と古墳時代中期後半の方墳１基（中央）を確認し、Ｆ区では古墳時代後期の円墳１基も確認したが、いずれも墳丘及び埋葬施設は削平されていた。

木棺墓（もっかんぼ）（東から）

Ｉ区では、方形周溝墓と数基の木棺墓からなる墓域を確認した。写真の木棺墓は長さ2.4ｍ、幅1.1ｍの土坑の中心部に長さ２ｍ、幅0.6ｍの組合式木棺を置いていたものとみられる。

方形周溝墓と古墳

木棺墓

写真解説

弓波遺跡

掘立柱建物（南から）

G区で検出した古墳時代末期から奈良時代初め頃の掘立柱建物である。

３×５間と４×６間の建物が方向を揃えて配置されている。建物が重なる場所では、３回ほどの建て替えが確認でき、柱穴の一部には柱根や礎板が残されていた。

布掘建物（東から）

地面に溝を掘り、その中に柱を立て並べた掘立柱建物である。遺跡内では弥生時代後期から古墳時代初め頃にみられ、写真のA区では、近接した場所にまとまって建てられている傾向がみられ、建て替えも確認できる。

掘立柱建物

布掘建物

写真解説

弓波遺跡

平地式建物（北西から）

竪穴建物の一種で、床面が地面と同じ高さか若干掘り込んだ状態で建てられた建物である。遺跡内では弥生時代後期から古墳時代初め頃にみられ、写真のB区では、碧玉（つへきぎょく）の破片が出土しており、この平地式建物では石製品を製作していたとみられる。

石製品の未成品

遺跡内では、弥生時代後期から古墳時代前期頃にかけて、石製品の製作をしていたとみられる。碧玉製の管玉や蛋白石（たんぱくせき）（オパール）製の勾玉、碧玉製の合子（ごうす）（古墳に副葬される小型の蓋付容器）などの未成品（製作途中の失敗品）のほか、碧玉、蛋白石、瑪瑙（めのう）、紫水晶（むらさきすいしょう）などの破片が出土した。

平地式建物

石製品の未成品

写真解説

庄・西島遺跡、津波倉廃寺

調査区遠景（東から）

江沼盆地の中央部に位置する集落遺跡である。国道８号の拡幅工事に伴い平成27年度から調査を行っている。平成28年度の調査では弥生時代後期～終末期の竪穴建物・平地式建物、８世紀後半～９世紀の掘立柱建物などを複数確認した。

P区出土銅鏡

P区のSK8から出土した銅鏡である。直径は11cmを測り、木箱に入れられた状態で出土した。SK8からは、12世紀末～13世紀初頭の土師器皿や、時期は異なるが須恵器小壺も出土している。木棺痕跡は確認できなかったが、出土遺物からSK8は木棺墓と考えられる。

調査区遠景

P区出土銅鏡

平成28年度の発掘調査から

調査部長　垣内光次郎

1　はじめに

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターは、平成28年度に石川県教育委員会から９件78,990㎡の発掘調査を受託した。関係機関の内訳は、国土交通省が１件で、鉄道運輸機構が８件であった。本号では平成28年度に当法人が実施した発掘調査のうち、本誌第37号で紹介した４件以外の概要を紹介する。また、石川県金沢城調査研究所および県内市町が実施した主な発掘調査の概要も紹介する。

2　（公財）石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

八日市地方遺跡（小松市）は、北陸地域を代表する弥生時代中期の大規模な環濠集落として知られている。調査区北側のＡ区および南側のＤ区では、約30基もの方形周溝墓を検出し、連続的に築かれた様子を確認した。また、中央部のＣ区では、平地式建物、井戸、貯蔵穴などに加えて川跡を検出し、多数の弥生土器、玉作り関連の石製品のほか、編み籠や農具など多くの木製品も出土した。

梶井衛生センター遺跡（加賀市）は、動橋川右岸の沖積地に営まれた集落跡で、弥生時代後期の平地式建物や古代の掘立柱建物などを検出した。古墳時代ないし古代と推定できる井戸では、船底板を転用した井戸側が出土し、川跡からは多数の土器が出土した。

弓波遺跡（加賀市）は、調査面積が３万㎡を超えたことから調査区を東西に二分したが、弥生時代の平地式建物、布掘建物、井戸などの生活遺構は全域にみられた。東部地区では居住群と近接する地点で、弥生時代後期の方形周溝墓や木棺墓が設営された墓域を確認した。Ｄ・Ｅ区では古墳時代前期の東西方向に並ぶ方形区画溝を検出した。東側は一辺25ｍ、北辺の中央部が陸橋状に掘り残されており、出入口とみられる。西側の区画溝は一辺26ｍで、西辺中央に陸橋状の掘り残しがあり、西側の溝からは前期頃の土器が大量に出土した。また、古墳時代中期の方墳１基と後期の円墳１基を確認したが、いずれも墳丘や埋葬施設は削平されていた。他方、西部地区のＡ・Ｂ区では、弥生時代後期から古墳時代前期の居住域において、掘立柱建物や布掘建物、平地式建物、船底板を井戸側に転用した井戸などを確認し、碧玉製の管玉、蛋白石（オパール）製の勾玉などを製作した地点を検出したことで、多くの玉作り関連遺物が出土した。

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市）では、西側の調査区で８世紀後半～９世紀の掘立柱建物と倉庫群を検出し、10棟以上の建物が計画的に配置された様子を確認した。出土品には、土師器や須恵器の製品に加えて、奈良時代の平瓦や古代末頃の銅鏡がある。東側の調査区域では、弥生時代～古墳時代の掘立柱建物、土坑、井戸を確認し、西側の調査区域で古代の掘立柱建物、土坑、井戸等を確認した。また、瓦は出土したが、寺院に関連する遺構は確認されなかった。

大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市）は、古墳時代末から中世の小規模な集落跡で、鞍部地形の上層からは各時代の遺物が出土し、下層からは縄文土器と旧石器時代末の尖頭器が出土した。

なお、平成28年度の現地説明会は、西任田遺跡、中ノ庄遺跡で６月、八日市地方遺跡で７月、庄・西島遺跡、津波倉廃寺と弓波遺跡（東部）で10月、弓波遺跡（西部）で11月、中ノ庄遺跡で12月に実施しており、延べ700名の参加者があった。また、西任田遺跡、中ノ庄遺跡（能美市）、中ノ江遺跡（能美市・小松市）、松梨遺跡（小松市）、弓波コマダラヒモン遺跡（加賀市）の概要については本誌第37号を参照されたい。

3　石川県金沢城調査研究所が実施した調査

鼠多門・鼠多門橋の復元整備に係る基礎資料を得るための確認調査をおこない、門正面の鏡柱・脇柱などの構造や、門から紅葉橋に至る坂道、鼠多門橋の橋脚や護岸施設などを確認した。

4　市町が実施した主な調査

能登町は松波城跡の確認調査で、城跡の先端部で掘立柱建物、礎石建物などを確認した。また旧松波城庭園では、保存整備に係る確認調査を行い、礎石建物を検出した。

七尾市は３件の調査を行った。若林一ノ坪遺跡では、古代～中世の土坑、溝等を確認し、土師器、須恵器、珠洲焼が出土した。小丸山城跡は駐車場整備に伴う調査で城郭遺構の確認に努めたが、弥生時代終末期の土坑や土器など、城構築以前の歴史を確認した。また、古府総社遺跡は能登国府の確認調査で、土坑からは古代瓦や須恵器が出土した。

中能登町は小竹ヘブタＢ遺跡で、中世の柱穴や土坑を検出し、土師器皿、珠洲焼が出土した。

志賀町は相神オトゴバタケ遺跡の調査で、多くの弥生土器の他、土師器、珠洲焼などが出土した。

羽咋市は３件の調査を行った。滝ソウデンＢ遺跡は県営は場整備に伴うもので、柱穴や溝からは古墳時代～古代の土器や陶磁器が出土した。柳田シャコデ廃寺跡の確認調査では、方形・長方形の大型柱穴列や土師器埋納土坑などを検出し、隣接する里山海道の工事で、寺家遺跡なども発掘した。

津幡町は北国街道跡（県史跡）の性格を把握するため、長楽寺門前の調査を行った。

金沢市は８件の調査を行った。このうち木越光徳寺跡では、中世の掘立柱建物、井戸、区画溝などを検出し、古代の墨書土器、中世の土師器や陶磁器、銅銭が出土した。千田北遺跡でも古代～中世の掘立柱建物や竪穴状遺構、区画溝を検出し、宗教活動を物語る卒塔婆や転読札が出土した。砂子坂道場跡では戦国期の堀を確認し、善徳寺遺跡は平坦地や堀や虎口に調査区を設定し、15世紀後半の土師器皿、青磁碗、越前焼などが出土した。また二俣本泉寺庭園遺跡では、州浜状の集石や整地を検出し、土師器・陶磁器などが出土した。金沢城下町遺跡では、本多氏屋敷跡地区の石垣解体修理に係る確認調査、兼六元町15番地点で北国街道沿いの発掘、総構沿いの柿木畠遺跡で中下級の武士屋敷跡を確認し、石組の井戸や地下室、曲水遺構や造成地などから江戸前期以降の生活用具が出土した。

野々市市は４件の調査を行った。富樫館跡では方形土坑や溝を確認した。上林イシガネ遺跡では短刀を埋置した区画溝、擂鉢を埋めた土坑がある中世遺構面と、多くの土坑がある古代遺構面の２面を確認した。上新庄チャンバチ遺跡では弥生時代と古代の集落遺跡を検出した。末松廃寺跡（国史跡）の調査は、大型の方形土坑、柱穴、竪穴建物などを検出した。

白山市は６件の調査を行った。このうち横江荘遺跡、横江Ａ遺跡では、３箇所の調査区を設け、弥生時代後期～古墳時代の集落や川跡を確認し、焼失した竪穴建物、方形周溝墓なども検出した。小川新遺跡では中世の掘立柱建物、竪穴状遺構、石組み井戸など、「小川津」に関連する遺構群を確認した。竹松Ｃ遺跡や北安田南出ヌノハシ遺跡では、弥生時代後期～古墳時代の集落を発掘した。

能美市は高堂遺跡の調査で、奈良・平安時代の集落を確認した。

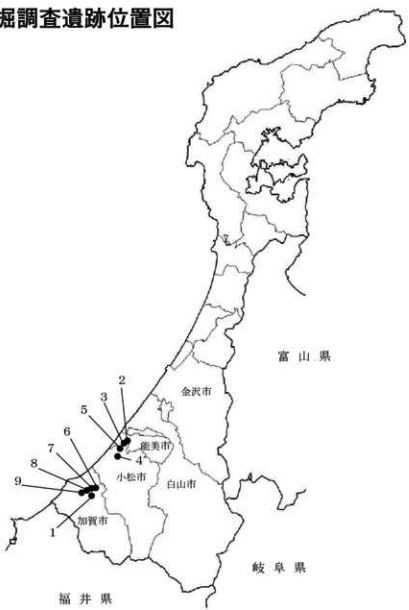
小松市は６件の調査を行った。古府しのまち遺跡は国府推定地の確認調査で、古代～中世の出土品がみられた。小松城跡、薬師遺跡、島遺跡（２地点）では小規模な調査を行い、矢田新遺跡においては古代～中世の土坑などから、土器や陶磁器などが出土した。

加賀市は九谷磁器窯跡（国史跡）で「朱田」周辺の調査を行い、九谷焼生産の作業場を確認した。また三木古墳群では５号墳（仮）が径約７ｍの円墳で、埋葬施設から十数点の須恵器が出土したことで６紀前半頃の築造を確認した。

平成28年度発掘調査遺跡

No	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	関係機関	関係事業
1	○	庄・西島遺跡、津波倉廃寺（しょう・にしじま、つ ぱくらはいじ）	加賀市庄町他	7,960	弥生～中世	国土交通省	一般国道8号改築（加賀拡幅）
2		西任田遺跡、中ノ庄遺跡（にしにだ、なかのしょう）	能美市西任田町、中庄町、赤井町、五間堂町	11,340	弥生～中世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
3		中ノ江遺跡（なかのえ）	能美市中ノ江町 小松市蛭川町	14,000	弥生～中世		
4	○	八日市地方遺跡（よっかいちじかた）	小松市土居原町	6,790	弥生、中世		
5		松梨遺跡（まつなし）	小松市松梨町、蛭川町	1,550	古代～中世		
6	○	梶井衛生センター遺跡（かじい）	加賀市梶井町	2,540	弥生～中世		
7	○	弓波遺跡（ゆみなみ）	加賀市弓波町、八日市町	31,290	弥生～中世		
8		弓波コマダラヒモン遺跡（ゆみなみ）	加賀市弓波町、作見町	1,720	弥生～中世		
9	○	大菅波コショウズワリ遺跡（おすがなみ）	加賀市大菅波町	1,800	古墳～中世		
	5件	9件		78,990			

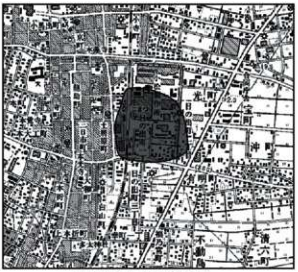
平成28年度　発掘調査遺跡位置図



八日市地方遺跡

所 在 地　小松市土居原町、日の出町地内
調査面積　4,600㎡

調査期間　平成28年4月15日～同年10月2日
調査担当　林　大智　加藤江莉

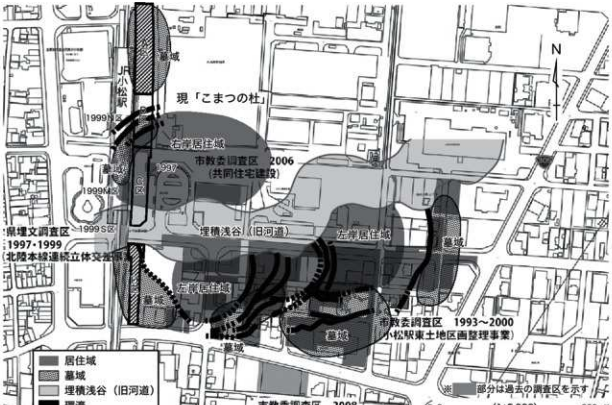


遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 周囲に平坦な沖積低地がひろがる水上交通の要衝に営まれた弥生中期の大規模集落。
- 平成28年度調査区のうち、遺跡の南北端に位置するA区、D区の概要を報告。
- 両地区あわせて30基を超える方形周溝墓で構成された広大な墓域を確認。
- さらにA区では、室町時代の区画溝と井戸２基を確認。当該期の集落が、調査区周辺に展開していたことを窺わせる。

八日市地方遺跡は、ＪＲ小松駅の東側一帯に広がる弥生時代中期の大規模環濠集落で、平坦な沖積低地内に形成された標高１～２ｍ程度の浜堤列上に立地している。遺跡周辺は、梯川とその支流の合流地点にあたると共に、干拓事業で消滅・縮小した潟湖が所在することから、水上交通の要衝に位置する遺跡として捉えられる。



調査区の位置と遺跡概要図（縮尺：1/5,000）

八日市地方遺跡の存在は、大戦前から地元の方々に知られており、これまで多数の発掘・試掘調査などが行われている。なかでも、小松市教育委員会が、平成５（1993）年度から平成12（2000）年度にわたり実施した駅東土地区画整理事業に係る発掘調査では、平地建物、掘立柱建物、井戸、小穴などで構成された居住域や、居住域に隣接して築かれた方形周溝墓を主体とする墓域、居住域を取り囲むように掘られた多重の環濠などが確認された。また、この調査では、数十万点におよぶ膨大な出土品が見つかっており、そのうち1,020点は平成23年に国の重要文化財に指定されている。

一方、石川県は、平成９（1997）年度に小松駅付近連続立体交差事業に係る発掘調査（面積：270㎡）、平成11（1999）年度に小松駅舎本体工事に係る発掘調査（面積：6,000㎡）を実施し、平成27（2015）年度からは、北陸新幹線建設に係る発掘調査を開始している。

平成28（2016）年度の発掘調査は、Ａ区、Ｄ区とＣ区の一部を対象としており、本稿では、そのうち遺跡北西端に位置するＡ区と南西端にあたるＤ区の概要を報告する。

Ａ区では、調査区南半に密集する15基程度の方形周溝墓、井戸３基、区画溝などを検出した。方形周溝墓は、墳丘長辺で４ｍ程度を測る小形墓（SZ10）から遺跡内最大級の15ｍを超える大形墓（SZ6）まで様々な規模のものがみられ、周溝の四隅が途切れるものを主体とする。また、多くの方形周溝墓は、隣接する周溝墓と溝を重複・共有させ、主軸方位を揃えて列状に築造されており、造墓単位群の抽出が可能である。調査区のほぼ全面を覆い尽くす近世以降の攪乱により、墳丘及び周溝上部を削平されたものが大半を占め、調査区南東端のみに墳丘盛土の一部や埋葬施設（SK10）が確認できた。

方形周溝墓群の隣接地では、井戸（SE3）を確認した。 出土遺物は僅かであったが、覆土などから周囲の方形周溝墓と同時期の遺構と判断した。井戸枠は確認できなかったが、北東側に向かって杭とスロープで通路状施設が造りだされており、降下取水式の井戸として捉えることができる。

八日市地方遺跡は、弥生時代中期の大規模環濠集落として著名であるが、Ａ区と平成27年度調査区（Ｂ区）では、室町時代（14世紀）の井戸５基や区画溝２条などを検出した。全ての井戸では、湧水による壁面の崩壊を防ぐため、水溜に曲物が設置されており、水溜上部に礫が積まれたものも存在する。近世以降の削平をうける前は、区画溝を巡らせた室町時代の集落が近辺に広がっていたことを推測できる。

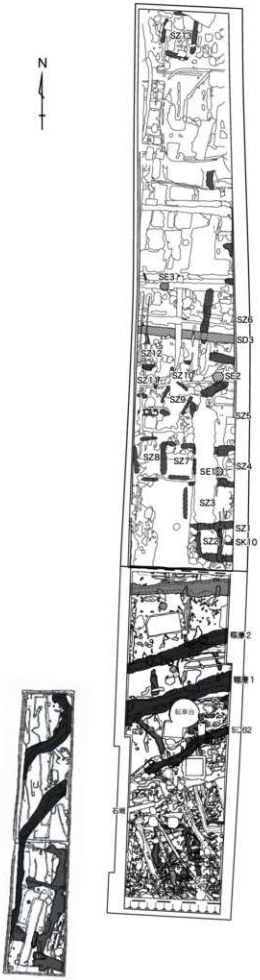
遺跡の南西端にあたるＤ区では、調査区のほぼ全域に展開する16基以上の方形周溝墓を検出した。墳丘規模は、Ａ区と同様に様々な規模のものを確認できるが、隣接する周溝墓と溝を重複・共有させるもの、周溝の四隅が途切れるものは少数に留まり、墓群の造営過程や景観は、Ａ区とＤ区で異なっていた可能性が高い。なお、Ｄ区で最大規模を誇る方形周溝墓（SZ1）の東辺周溝は、小松市教委の調査区（31地区）で検出された環濠12に繋がる可能性が高い溝と重複して掘削されている。

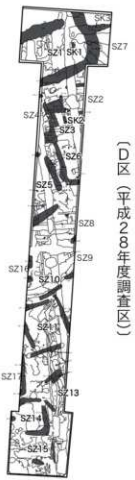
方形周溝墓の墳丘内部からは、２基の埋葬施設（SK1、SK2）を検出した。両者共に組合せ式木棺が用いられており、SK1からは碧玉製管玉２点が出土した。また、SZ7では、周溝内を掘り込んで設置された埋葬施設（SK3）を検出し、被葬者の頭位方向と推測される東端付近からは、赤色顔料が確認された。

さらにＤ区では、Ａ区の周溝墓にほとんど確認できなかった供献土器が、周溝のコーナー付近で顕著に認められた。　　（林　大智）

Ａ区方形周溝墓群（SZ7･8）完掘状況（南西から）

D区北側 方形周溝墓群完掘状況（北から）





■ 掘立柱建物（弥生）　■ 環濠（弥生）
▤ 平地建物（弥生）　▤ 井戸（弥生）
■ 方形周溝墓（弥生）　▨ 井戸（中世）
▥ 土坑墓（弥生）　▩ 区画溝（中世）

0　(1:800)　40m

遺構概略図（縮尺：1/800）

A区 埋葬施設（SK10）木棺痕跡検出状況(東から）

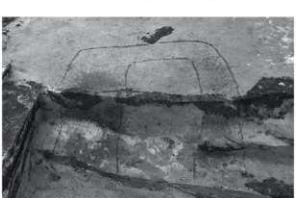
A区 井戸（SE3）完掘状況（南西から）

A区 井戸枠（SE2）検出状況（北から）

A区 区画溝（SD3）土層断面（西から）

D区 方形周溝墓（SZ14）完掘状況（北西から）

D区 方形周溝墓（SZ17）調査状況（南東から）



D区 埋葬施設（SK1）検出状況（西から）

D区 供献土器（SZ5）出土状況（北から）

梶井衛生センター遺跡

所在地　加賀市梶井町地内　　調査期間　平成28年10月24日～平成29年1月20日

調査面積　2,540㎡　　調査担当　浜崎悟司、越前慎子、横山純子、野口沙愛

遺跡位置図（S=1/25,000）

遺跡位置図（S=1/1,500）

調査区遠景（北から）

調査成果の要点

- 弥生時代の平地式建物と古代の掘立柱建物を検出した。
- 古墳時代ないし古代と推定される船底板転用井戸と古代の矢板を使用した井戸を確認した。

梶井衛生センター遺跡は加賀市梶井町地内の動橋川右岸に位置し、弥生時代中期から中世まで断続的に続く遺跡である。北陸新幹線建設に先立ち、東西約200ｍの範囲を調査した。遺構は、１区東側と２区西側から多く検出した。

弥生時代中期では、平地式建物・溝・土坑を確認した。平地式建物は、外周溝と４基の主柱穴からなるもので、柱穴には柱根を残すものもあった。土坑からは管玉未成品が出土しており、本遺跡では弥生時代中期には玉作りを行っていたとみられる。

弥生時代後期では、川跡を確認した。川跡は、幅約21ｍ、深さ約2.8ｍを測る。遺物は弥生土器、木製品があり、特に木製品が多く出土している。川底からは、弥生時代後期の木製鍬身や網枠が出土している。古墳時代から古代の須恵器や土師器が、川岸や窪地で集中して出土する箇所もあり、数百年に及ぶ埋積過程の中で、廃棄場化したと考えられる。

古代では、掘立柱建物や井戸や溝などを確認した。掘立柱建物は、２×２間とみられる建物が４棟、３×３間の側柱建物が１棟ある。２×２間の建物は、全て総柱式で、柱間が狭く正方形に近い柱穴配置をみせることから倉庫群の可能性があろう。

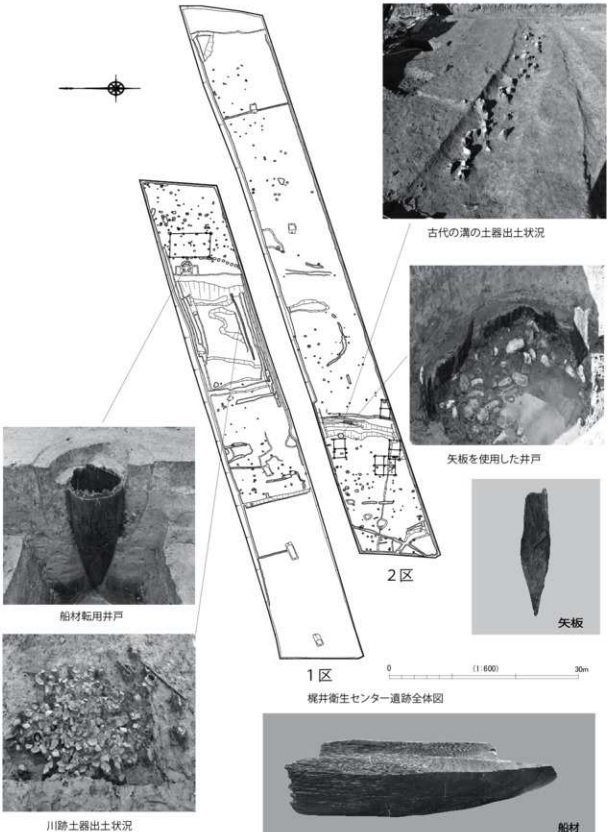
井戸では、船底板や矢板を井戸側に転用したものを確認した。古墳時代末ないし古代と推定される井戸は、直径約0.6ｍ、深さ約1.7ｍであり、船底板を井戸側として再利用している。遺物は、上部からは古代の須恵器、底部からは古墳時代末の須恵器が出土している。井戸側内の底には浄水のため小砂利が敷かれている。古代の井戸は、深さが約0.5ｍあり、矢板を打ち込んで井戸側としていた。遺物は須恵器や土師器が出土した。この井戸にも井戸側内の底に浄水のため小砂利が敷かれている。

古代の溝は幅が最大約2.8ｍ、深さ約0.3ｍあり、須恵器や土師器が出土している。

中世では、土坑を確認し、加賀焼、石鉢、砥石、炉壁、鉄滓、木製品が出土している。

本遺跡は、工事による不時発見により古代の遺跡としては周知されていたが、今回の調査により古代以前の様相を知ることができた。弥生時代後期の川跡は、動橋川の旧河道の可能性があると考えられる。

（野口沙愛・浜崎悟司）



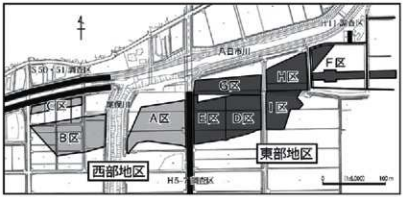
弓波遺跡

所 在 地　加賀市弓波町、八日市町地内　　調査期間　平成28年４月13日～平成29年２月１日
調査面積　31,290㎡　　調査担当　久田正弘、澤辺利明、立原秀明、熊谷葉月
中森茂明、瀧野勝利、安中哲徳、川名　俊、萩山教俊、神谷英生、増永佑介、西村　翼

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代末期～奈良・平安時代、中世の集落を確認した。
- 弥生時代後期～古墳時代前期の平地式建物や布掘建物、掘立柱建物、井戸などを確認し、碧玉製管玉などの石製品製作地点を検出した。
- 弥生時代後期の方形周溝墓２基と木棺墓を確認した。これに近接して古墳時代中期の方墳１基と後期の円墳１基を確認した。いずれも墳丘や埋葬施設は削平されていた。
- 古墳時代前期頃の１辺約25mの方形区画溝を２基並んで確認した。
- 古墳時代末期～中世では、総柱を含む掘立柱建物や井戸、土坑、竪穴状遺構を確認した。



調査区割図

弓波遺跡は、加賀市の北部に位置し、江沼平野を流下する八日市川と尾俣川の合流部周辺に広がっている。過去には昭和50・51年度の河川改修事業、平成５～７・11年度に農業関連事業に伴う発掘調査が行われており、弥生時代から室町時代の集落が確認されている。

今回の発掘調査は北陸新幹線建設（金沢・敦賀間）に伴うもので、八日市川の付替工事が含まれたことにより３万㎡を超える広大な調査面積となった。新幹線建設の工程上、一部の工事が調査と並行して行われるため、これに対応すべく調査地を大きく東部地区と西部地区に分け、さらにA区からＩ区までの調査区を設定した。

以下では、地区毎に分けて時代順に概要を述べることとする。

調査区遠景（東から）

【東部地区】

調査地の旧地形は過去のほ場整備により大きく削平されているが、全体を俯瞰するとH区の北端で八日市川の旧流路を確認し、その周辺は標高１ｍ代で遺構は少ない。その南西側のＤ・Ｅ・Ｇ・Ｉ区は標高２～３ｍ代で広大な微高地上に建物を中心とする多くの遺構が検出された。東側に位置するＦ区は標高２ｍ代だが、南北方向の谷地形がいくつか確認され、狭小な微高地上に構築された古墳や区画溝的な遺構が主体となっている。なお、Ｆ区の一部では縄文時代の打欠石錘が出土した谷地形を下層面として調査した。

調査の結果、主に弥生時代後期、古墳時代末期から平安時代、中世の集落並びに方形周溝墓、古墳など墳墓に関連する遺構を確認した。

弥生時代後期の遺構は、Ｄ・Ｉ区で平地式建物、布掘建物、掘立柱建物がみられた。井戸はＤ・Ｅ・Ｉ区に５基ほどが点在しており、中には刳貫桶を井戸枠に転用するものがみられた。

一方、Ｉ区では方形周溝墓や木棺墓からなる墓域が集落と近接して形成されていた状況が確認された。方形周溝墓は２基あり、それぞれに木棺墓の周溝内埋葬がみられた。当該期の遺構はＧ・Ｅ区で検出された北東－南西方向にのびる延長約120ｍの溝が境となっていて、これより西側は遺構が希薄な状況である。

古墳時代前期の遺構では、Ｄ・Ｅ区で東西方向に並ぶ方形区画溝を検出した。東側の区画溝は一辺25ｍ、北辺の中央部が長さ３ｍの陸橋状に掘り残されており、区画内部への出入口とみられる。区画内の施設としては、中心よりやや南東に位置する１×３間の掘立柱建物が区画溝の軸と合うことから同時期の可能性がある。西側の区画溝は一辺26ｍで西辺中央に同じく出入口とみられる陸橋状の掘り残しがある。区画内で明確な施設は確認できなかった。西側の溝からは前期頃の土器が大量に出土した。古墳時代中期から後期では、Ｆ区で直径13ｍの円墳１基とＩ区で一辺23ｍの方墳１基を確認した。どちらも墳丘及び埋葬施設は失われていた。円墳の周溝からは、大甕や壺などの須恵器がまとまって出土しており、墳丘に供献された土器が周溝に落ち込んだものと考えられる。円墳との関係は定かではないが、周辺から須恵質の円筒埴輪の破片も出土している。

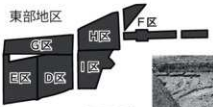
古墳時代末期から奈良時代初め頃では、掘立柱建物、井戸などを検出した。掘立柱建物は大きく西に45度前後傾くものと、西に５度前後傾く２グループに分けられる。前者のグループには梁行３・４間のものが多くＥ・Ｇ区にまとまりがある。Ｇ区西側では軸を揃えた３×５間や４×６間の掘立柱建物数棟が同じ場所で建て替えられている。後者はＤ・Ｉ区に梁行２・３間があり、その周辺には２×２間の総柱建物が確認できる。特別な建物としてはＥ区では長さ約５ｍの１間四方の掘立柱建物を検出した。４基の柱穴は径0.7～0.8ｍの円形を呈し、それぞれに径0.4ｍの柱根とその下部に礎板が残されていた。柱根の下端側面には運搬の縄掛け用とみられるえぐりが施されている。

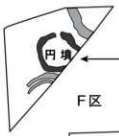
当該期の井戸は少ないが、Ｇ区で検出した井戸は、底付近に蒸籠組の井戸枠１段分が残され、枠内には浄水を目的とした玉石が詰められていた。

平安時代の遺構は少数だが、Ｄ・Ｉ区で半裁した刳貫材を向かい合わせに置いた井戸枠を確認した。Ｉ区の刳貫材は長さ1.8ｍあり、船底板を転用した可能性がある。

中世は、Ｄ・Ｅ区を中心に建物や土坑がみられた。屋敷地割とみられる東西南北にのびる溝によって区画されており、建物の多くは総柱である。井戸は曲物を転用したものなどがみられ、建物の北側に配置される傾向にあるが、建物が確認できなかったＩ区やＨ区でも検出している。

Ｅ区の竪穴状遺構は覆土の一部に炭化材や炭で埋められた痕跡がみられ、土師器皿や砥の破片が出土した。他には下駄や建築材とともにフイゴの羽口、坩堝、土師器皿を廃棄した土坑を確認した。時



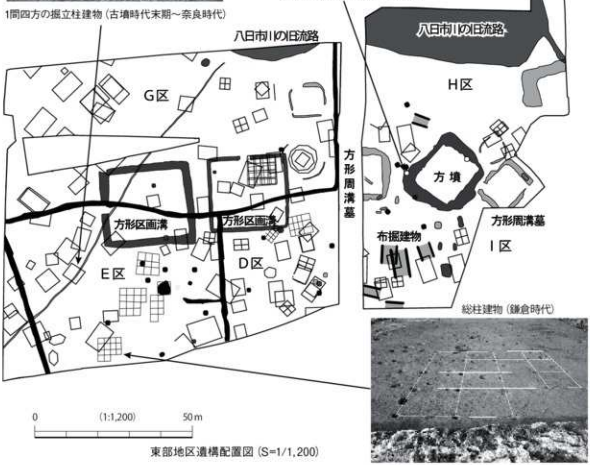


円墳完掘状況（古墳時代後期）

円墳周溝内土器出土状況

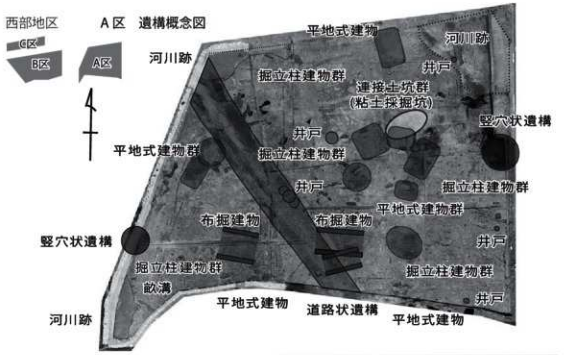
1間四方の掘立柱建物（古墳時代末期～奈良時代）

船底板転用の井戸枠（平安時代）



総柱建物（鎌倉時代）

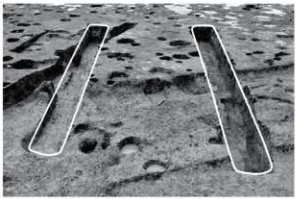
東部地区遺構配置図（S=1/1,200）



道路状遺構と側溝（室町時代～江戸時代）

弓波廃寺と同型の軒丸瓦（奈良時代）

［凡例］　碧玉を多く出土する平地式建物・碧玉集中地点　井戸
布掘建物　竪穴状遺構　土坑群（粘土採掘坑）

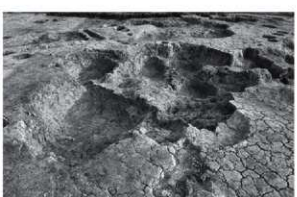


平行する布掘建物の溝（弥生時代後期）

建て替えがみられる平地式建物群（弥生時代後期）

船底板を転用した井戸枠（弥生時代後期）

円形の平地式建物（弥生時代後期）



粘土採掘坑と考えられる土坑群（弥生時代後期）

方形の平地式建物（弥生時代後期）

土坑に廃棄された土器（弥生時代後期）

炉跡から出土した碧玉（弥生時代後期）

弓波遺跡（西部地区）

期は土師器皿の年代観から鎌倉時代に属するものと考えられる。

東部地区の特筆すべき成果として、古墳時代前期の方形区画溝を検出したことがあげられる。東西に近接する２基ともに全形が判明した貴重な資料である。中世では、屋敷地割で区画された集落の状況が明らかになった。（立原秀明）

【西部地区】

調査地は尾俣川を挟み東側のＡ区と西側のＢ・Ｃ区に分かれる。Ａ～Ｃ区の遺構検出面は標高２ｍ代を測り、弥生時代後期の平地式建物や布掘建物や井戸、古墳時代後期から中世の掘立柱建物や井戸などを検出した。また、八日市川と尾俣川沿いでは、旧流路を確認しており、土器や木製品が出土した。

Ａ・Ｂ区では、縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文土器や石鏃・石斧・黒曜石製の石器が出土しており、調査区周辺に集落域の存在が想定される。

弥生時代では、Ａ区およびＢ区の東側で、後期の掘立柱建物や布掘建物、平地式建物、船底板を転用した井戸などの集落域を確認し、碧玉製の管玉、蛋白石（オパール）製の勾玉未成品（製作途中の失敗品）など、玉製作関連遺物が多く出土した。Ａ区の玉製品製作地点の近くでは、連接して掘られた土坑群を検出した。土坑は地下の粘土層まで深く掘られており、土器づくりの材料にするために粘土を採掘した土坑（粘土採掘坑）の可能性がある。中からは、埋めた時にまとめて廃棄されたと考えられる後期の土器や碧玉の破片、木製品などの遺物が多く出土した。また、後期以降の河川跡を確認し、廃棄された土器や石製品、木製品が多く出土した。

古墳時代前期では、碧玉製の管玉や合子（古墳に副葬される小型の蓋付容器）の未成品、ガラス玉など玉製作関連遺物が出土した平地式建物や包含層を確認した。

古墳時代後期から奈良時代初頭の掘立柱建物や井戸、土坑などの集落域を確認し、土師器や須恵器、瓦などが出土した。川を挟み北側約200ｍに位置する白鳳寺院の弓波廃寺（７世紀後半頃創建）との関連が注目される。また、古墳時代中・後期以降の河川跡から多量の土器とミニチュア土器や剣形の石製模造品、臼玉、刀形木製品などが出土し、川縁で祭祀行為を行っていた可能性がある。

奈良・平安時代では、掘立柱建物や畝溝を確認し、土師器や須恵器・瓦などが出土した。遺構の分布は希薄だが、周辺に寺院の存在が想定される。

中世（鎌倉・室町時代）では、掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸などの集落域を確認し、土器や越前焼・加賀焼・珠洲焼・白磁・青磁などの陶磁器、砥石や石臼などの石製品が出土した。また、砂利を盛って路面を整地し、両側に側溝を持つ室町時代以降の直線状に延びる道路状遺構を確認し、土器や陶磁器、瓦、宋銭などの銅銭や宝篋印塔などの石造物が出土した。

西部地区の主な調査成果として、Ａ・Ｂ区では、弥生時代後期から古墳時代前期の建物や平地建物、井戸、土坑、溝などを検出した。碧玉（緑色凝灰岩）製の管玉や合子の未成品、蛋白石（オパール）製の勾玉未成品とともに、碧玉原石を割った破片（総重量約80kg 以上）や蛋白石、紫水晶、瑪瑙、頁岩などの破片も出土したことから、弥生時代後期以降、古墳時代前期にかけて石製品を製作していた集落があったことが判明した。弓波遺跡の周辺地域ではこれまで、北側約１km に存在する片山津玉造遺跡や南東側約２km に存在する二子塚東田遺跡などが、古墳時代前期における碧玉を使用した石製品を製作していた遺跡として知られてきたが、今回の弓波遺跡における管玉や勾玉未成品などの石製品製作地点の発見から、江沼地域における石製品生産の開始時期が、弥生時代後期にさかのぼることが新たに判明した。

今後の整理作業の進展により、南加賀地域における石製品製作遺跡と石材原産地（採取地）の関係や石製品製作方法復元などの研究に、新たな材料を提供するものと期待される。（安中哲徳）

庄（しょう）・西島（にしじま）遺跡、津波倉（つぼくら）廃寺（はいじ）

所 在 地　加賀市津波倉町地内他
調査面積　7,960㎡
調査期間　平成28年5月25日～平成29年1月30日
調査担当　岩瀬由美、武部修一、西田昌弘、長谷川仁嗣
佐々木華子、土居佑治

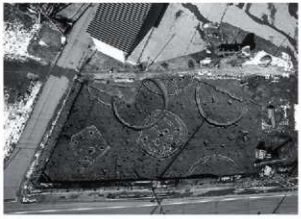
遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 調査区東部では弥生時代後期～終末期の竪穴建物・平地式建物を複数確認した。
- 調査区西部では８世紀後半～９世紀の掘立柱建物を10棟以上確認した。
- 遺構・遺物は弥生時代・古代が主体であるが、中世の木棺墓から銅鏡が１面出土した。

庄・西島遺跡は江沼盆地の中央部に位置する集落遺跡である。遺跡は標高10m前後に立地し、約１km 東には大日山を水源とする動橋川が流れる。本遺跡の包蔵地内には古代寺院・津波倉廃寺の推定地も含まれている。

庄・西島遺跡の発掘調査は国道８号の拡幅工事に伴うもので、平成27年度はＡ～Ｃ区、Ｅ～Ｋ区で調査が行われた。調査の結果、弥生～古墳時代の建物跡・土坑、古代の掘立柱建物・井戸・土坑（群）、中世の用水路跡などが確認された。また、古代瓦片を散発的に検出したが、寺院跡と考えられる具体的な遺構は確認できなかった。


M区西半部全景（南東から）

第２次となる平成28年度はＤ、Ｌ、Ｍ～Ｑ区を中心に発掘調査を行い、弥生時代や古代の遺構・遺物などを確認した。弥生時代の主な遺構は、Ｍ区で確認した竪穴建物３棟、平地式建物５棟である。これらの建物跡は一部切り合って検出され、２時期以上の建て替えが想定できる。竪穴建物のうち１棟は一辺約６ｍの方形を呈する。残る２棟は円形で、１棟は直径約10m の大型建物である。この大型建物（SI1）では３本の壁溝が検出された。壁溝断面の切り合い関係等から、SI1 は南側を拡張する建て替えを確認している。

M区東端　区画溝・井戸

M区で検出された建物跡からは、いずれも法仏～月影式期の土器が出土し、短期間に建て替えが行われたと考えられる。また、M区の東端では中世の井戸や区画溝が確認された。

古代の主な遺構は、P区で検出した重なり合う13棟の掘立柱建物である。建物規模は1×1間から3×4間で、主軸が西に10～18°傾く。柱穴の切り合い関係から少なくとも3時期の建て替えが想定できるが、出土した土器の時期幅は8世紀後半～9世紀初頭と狭く、短期間に建物の建て替えが行われたと考えられる。

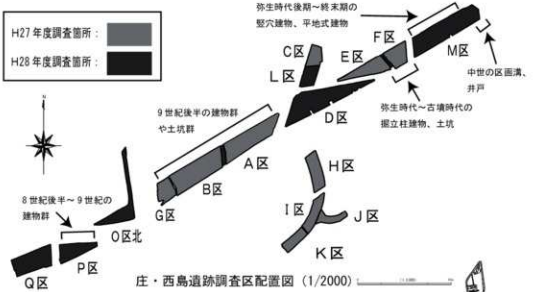
遺物は弥生土器や古代の土師器・須恵器を中心に木器、石器、陶磁器、瓦片、銅鏡などが出土した。瓦片は凸面に格子状タタキ目を、凹面に布目を持つ平瓦片である。平成27年度の調査では広い範囲で瓦片の出土が確認されたが、平成28年度はO区のSD2、SE1、P7で数点瓦片が出土するに留まる。

銅鏡はP区のSK8から木箱に入れられた状態で出土した。直径は11cmを測る。SK8からは銅鏡の他に12世紀末～13世紀初頭の7枚1セットの土師器皿や、時期は異なるが須恵器小壺が出土している。木棺痕跡は確認できなかったが、出土遺物内容からSK8は木棺墓と考えられる。

平成27～28年度の調査で確認した弥生・古代の建物群は調査区ごとに時期が異なり、遺跡内での建物群の変遷がうかがえる。庄・西島遺跡内の国道8号沿線は未調査の部分が未だ残っており、今後の発掘調査で沿線一帯の様相が明らかになることが期待される。

（佐々木華子）

庄・西島遺跡、津波倉廃寺調査区割図



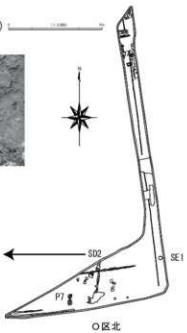
庄・西島遺跡調査区配置図（1/2000）

P区 SK8 銅鏡出土状況（北西から）

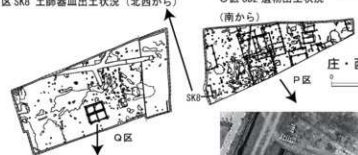
銅鏡出土状況拡大

P区 SK8 土師器皿出土状況（北西から）

O区 SD2 遺物出土状況
（南から）

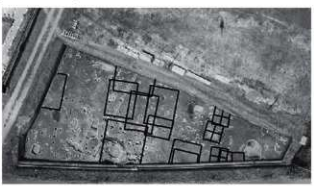


O区北



庄・西島遺跡遺構配置図（1/1000）

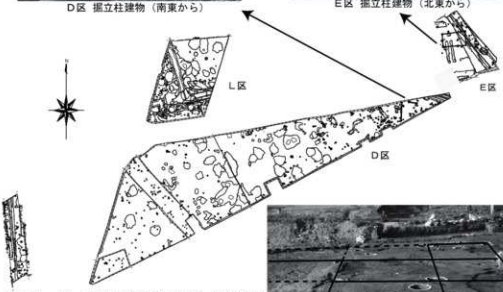
Q区 掘立柱建物（南東から）



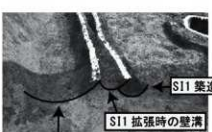
P区全景（南東から）

D区　掘立柱建物（南東から）

E区　掘立柱建物（北東から）



M区　掘立柱建物（南東から）



SI1 周溝断面

M区　竪穴建物・SI1（南西から）

M区　平地式建物（南西から）

大菅波（おおすがなみ）コショウズワリ遺跡

所 在 地　加賀市大菅波町地内
調査面積　1,800㎡
調査期間　平成28年9月26日～同年12月14日
調査担当　久田正弘、西村　翼

調査成果の要点
- 古墳時代末から中世にかけての集落跡と鞍部を確認した。
- 鞍部の上面では、縄文～中世の遺物が出土し、下層では旧石器時代末の尖頭器・縄文土器などが出土した。

遺跡位置図（S=1/25,000）

大菅波コショウズワリ遺跡は、加賀市北部に位置し、橋立丘陵の裾から平野部にかけて立地する。北陸新幹線建設によって確認された遺跡である。

東側では、古墳時代末から中世にかけての遺構・遺物を確認した。7世紀代と思われる4棟の掘立柱建物を検出し、SB01・02は側柱式建物、SB03・04は総柱式建物である。SB01・03、SB02・04がセットになると思われる。中世と思われる柱穴を確認したが、建物を復元するには至らなかった。

西側にある鞍部では、上面には溝やピットが存在し、中世土師器と縄文土器と磨製石斧が出土した。鞍部の下面では、旧石器時代末の木の葉型尖頭器、縄文土器、剥片などが出土した。

（久田正弘）

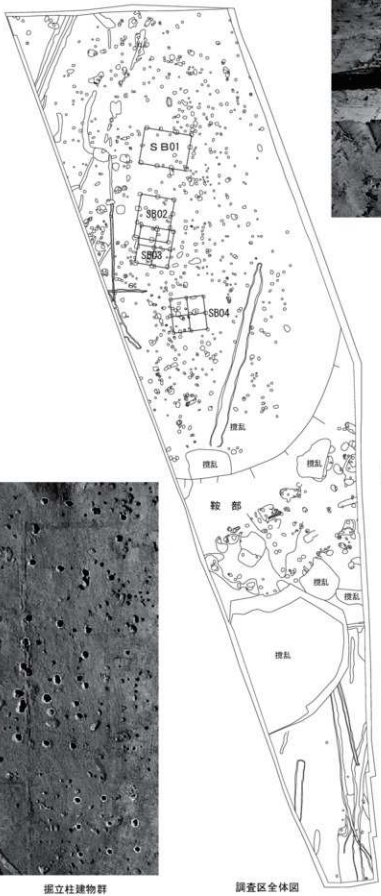
遺跡遠景

SB01（東から）

SB03（東から）

鞍部下層出土の尖頭器

掘立柱建物群



調査区全体図

平成28年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は一針Ｃ遺跡（小松市　平成27年度調査）の整理を行った。作業は上半期から継続の土器の記名・分類・接合と土器、木製品の実測である。

土器の記名・分類・接合は、27年度調査の中でも、Ｈ区、Ｈ区２面について行い、出土遺物は弥生時代、古代、中世と幅があり、当遺跡が長期にわたって営まれたことを示すものであり、器種もバリエーションに富んでいる。ただし、土器の状態があまり良好でないため、調整等が明瞭でないものが多い。また、接合しても取れやすく、壊れやすいので、収蔵にも気を使った。

木製品は、漆器（平成26年度分含む）、網代を実測した。網代は、針葉樹の板を編んだもので、古代の横板組井戸の底に浄水の為に設置されたものである。（横山そのみ）

記名・分類・接合（一針Ｃ遺跡）

甕の接合（一針Ｃ遺跡）

弥生土器の実測（一針Ｃ遺跡）

網代の実測（一針Ｃ遺跡）

県関係調査グループ

下半期は八日市地方遺跡（小松市　平成27年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町　平成27年度調査）、中カワナミマエダ遺跡（輪島市　平成27年度調査）、一針Ｃ遺跡（小松市　平成27年度調査）の出土品整理を行った。

八日市地方遺跡では、上半期より引き続き接合作業を行った。口縁、体部片、底部と土器片が多くある中で、上から下まで形になるものが少なかった。東海系の土器片を集めたが、個体になるまでには至らなかった。底部外面に葉脈の圧痕を持つものも見られた。

北吉田ノシロタ遺跡では、記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図トレースを行った。木製品では、大型の礎板が数点あり、実測での移動などがとても大変だった。

中カワナミマエダ遺跡では、遺構図トレースを行った。

一針Ｃ遺跡は、国関係調査グループと合同で整理作業を行った。　（土生久美子）

記名・分類・接合（八日市地方遺跡）

記名・分類・接合（北吉田ノシロタ遺跡）

大型礎板・柱の実測（北吉田ノシロタ遺跡）

弥生土器の実測（一針Ｃ遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、上半期に引き続いて金沢城跡（平成27年度調査）の記名･分類･接合、記名･分類、実測･トレースを行った。

記名・分類・接合と記名・分類では、主に陶磁器と瓦を中心に実施した。陶磁器の分類については、同じ絵柄のものが複数点あったため同一個体の振り分けが難しかった。また、瓦については、いぶし瓦の腰瓦と平瓦の区別や、近現代の釉薬瓦の仕分けに苦労させられた。

実測・トレースでは、染付の実測点数が多く、いろいろな絵柄を実測することは経験になったが、濃淡を出すために筆圧を強くしていたせいなのか、書き終わりには指が痺れていた。また、瓦の実測では鬼の顔を彫刻した鬼瓦が数点あり、髪や鼻・頬の凹凸を図面で表現するのに苦労した。金属製品は鉄下駄や蹄鉄・指輪・薬莢・五鈷杵など一風変わった遺物をいろいろ見ることができて経験になった。

（澤山　彬）

鬼瓦の実測（金沢城跡）

大型石製品の実測（金沢城跡）

石川県の長い石鏃について

久田　正弘

1．はじめに

私の職場は平成10年に開設された㈶石川県埋蔵文化財センターになってから、飛躍的に遺跡の調査量が増えた。各調査員は発掘調査をこなすことが精いっぱいであり、報告書が配布されたと同時に新たな知見や問題点を認識するのが普通であった。その中で中能登町（旧鹿西町）徳丸遺跡（財2004）にガラス質安山岩２として下呂石の長身鏃が報告された。筆者は、平成16年度の所内研修時に下呂石の現物を回覧されて共有化をはかってみた。その後、報告書や現場などで下呂石・黒色安山岩・黒色頁岩製長身鏃を確認したことから、本稿をまとめることにした。

2．県内の長身鏃

当初長さ35㎜以上の石鏃を集成し始めたが、かなりの量になることが予想されたので40㎜以上を対象とした。その結果、弥生時代の石鏃だけではなく、縄文時代の石鏃の中にも長い石鏃があるのを確認した。石材名は、報告書の記述を尊重したが、写真・実物・技法などから確認して筆者が変更した部分もある。石川県内は、輝石安山岩と呼ぶ黒色安山岩の産地が志賀町（旧富来町第２図■）にあり、無斑晶安山岩やガラス質安山岩と呼ばれていた。サヌカイトとも似ており、表皮（23）が付いていないと肉眼だけでは区別は難しい。よって、分析か表皮で確認された以外は、安山岩と呼称する。玉髄質泥岩は県内ではフリントと呼ばれ、新潟県では玉髄とされる石材であるが石川県で使用する玉髄とは異なる。県内では珠洲市横山海岸（第２図●）で採取される黒色半透明玉髄質泥岩（高田・大屋ほか2008）や淡茶褐色や透明に近いものなど数種類があり、産地は複数存在する可能性がある。珪質頁岩は、珠洲市内に産地が想定（西田2005）されており、凝灰岩や流紋岩は地質から北加賀・南加賀地方で産地が想定可能である。下呂石は、富山県ではハリ質安山岩、小松市八日市地方遺跡では玻璃質デイサイト（小松市2013）と呼称されている。

分類は、形態的に三角形を１類、柳葉形を２類、五角形を３類とした。基部の形態から凹基をａ類、平基をｂ類、円基・凸基をｃ類、有茎をｄ類として分類したが、厳密には分類に苦しむものもある。

第１図　石鏃の形態分類概念図

3．県内の状況

県内では、報告を確認できたのは65遺跡144点である。しかし、文献検索時の漏れ、報告前の資料や観察表だけの記載（真脇遺跡、八日市地方遺跡）などもあり、出土量はこれ以上存在する。発掘調査の少ない市町や金沢市街地化区域などは、分布が希薄である。また、著名な縄文遺跡と八日市地方遺跡以外は、１遺跡での出土量が少ない。縄文時代の遺跡は、時期幅がある場合が多いので大雑把に「縄文」とし、縄文時代か弥生時代か判断できないものと縄文時代晩期末～弥生時代前期（乾遺跡）

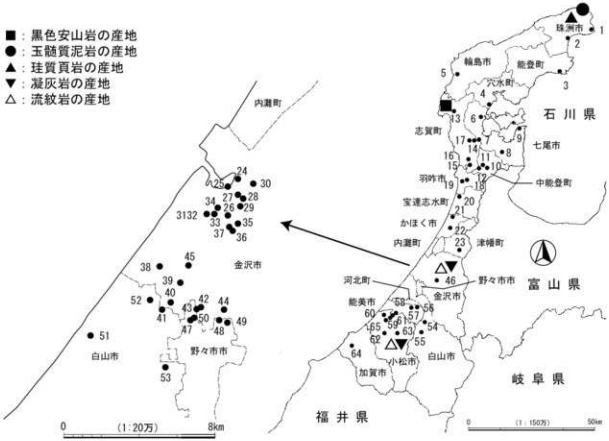
のものを「縄文・弥生」とした。なお、第4図59は報告書の図面自体が変形しているので、図上で修正したが正確ではない。

縄文の傾向をみてみたい。1a類18点は幅17～22㎜15点と集中する。2b類3点は幅20～22㎜、2c類2点は17～19㎜に集中する。2d類12点は、幅19㎜以下で12～16㎜11点に集中する。3a類7点は、幅15～18㎜4点に集中する。縄文全体では幅12～15㎜と17～22㎜に集中する傾向が伺え、長さは50㎜以下が多い。縄文時代の長い石鏃は、1a・2d類が主体である。石材的には、能登地方では玉髄質泥岩・珪質頁岩・安山岩が主体、北加賀地方では安山岩・玉髄質泥岩が主体で凝灰岩も目立ち、南加賀地方では流紋岩が主体である。玉髄質泥岩と安山岩は、産出地周辺のみならず広域に運ばれているが、珪質頁岩・流紋岩・凝灰岩は、産地周辺に限られる傾向がある。

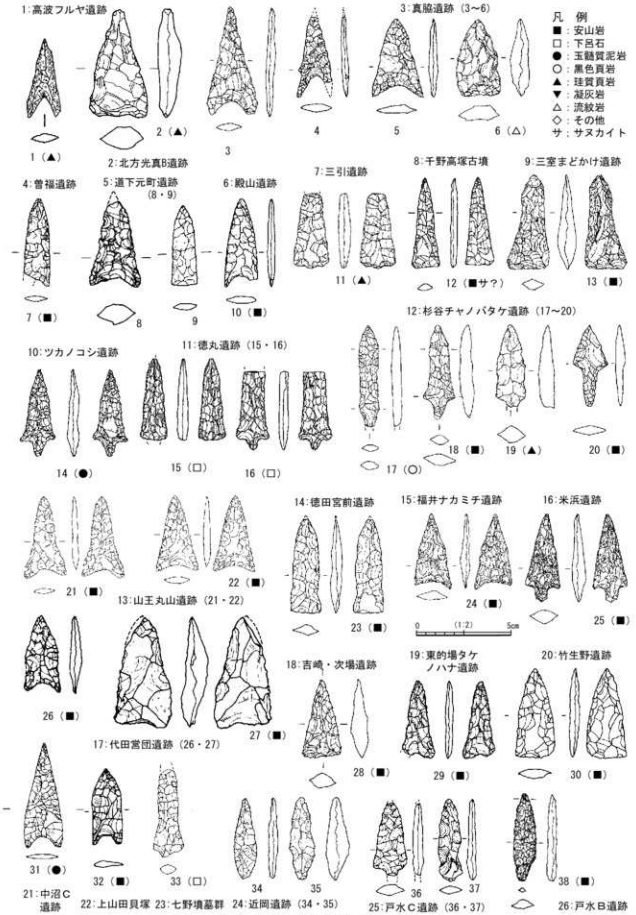
縄文・弥生は、1d類は18㎜、2d類は18㎜に集中する。石材は安山岩が主体である。

弥生の傾向をみてみたい。縄文に多い1a類4点は少なく、幅15～18㎜3点集中する。1b類15点は幅12～20㎜13点集中する。1d類は幅20㎜以下である。2b類5点は幅13～15㎜であり、長さも43～48㎜であり、サイズが近い。2c類3点は幅・長さともバラツキが多い。2d類4点は11～12㎜3点と細いものが多い。3a類4点は14～15㎜3点に集中するが、幅30㎜の26は弥生前期である。3b類20点は幅12～16㎜15点が集中し、7点は八日市地方遺跡である。3c類2点は幅15㎜である。3d類15点は幅14～20㎜に12点集中する。弥生全体では幅12～20㎜に集中し、13・15・18㎜前後が多い。縄文時代よりは細身になる傾向が伺える。弥生時代の長身鏃は、1b・3b・3d類が主体である。石材的には縄文に無かった下呂石製が13点確認され、八日市地方遺跡は5点と多い。

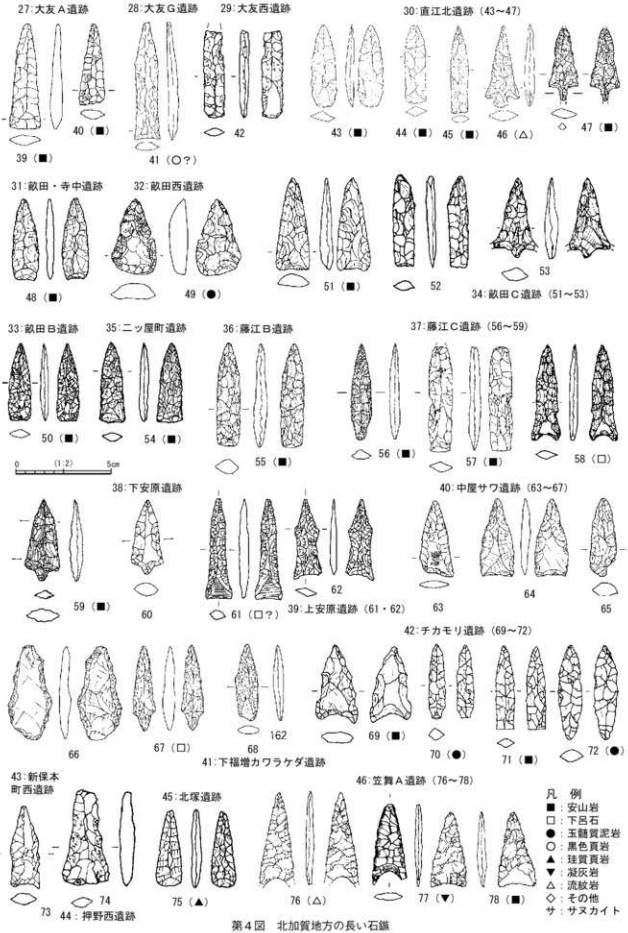
形態的には、1a類は縄文18点：縄文・弥生4点：弥生4点であり、圧倒的に縄文が多い。幅は縄文



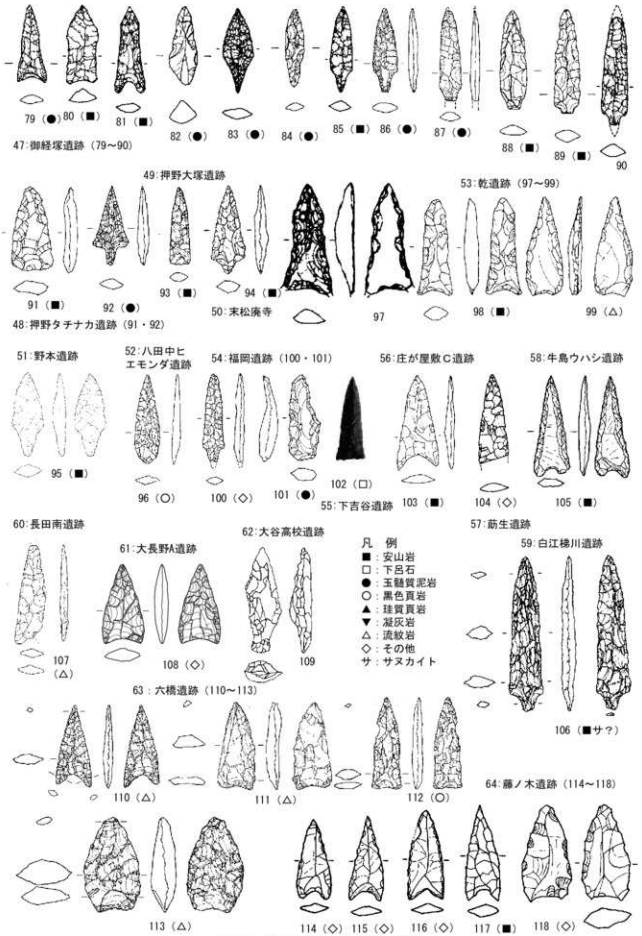
第2図　長い石鏃の出土遺跡



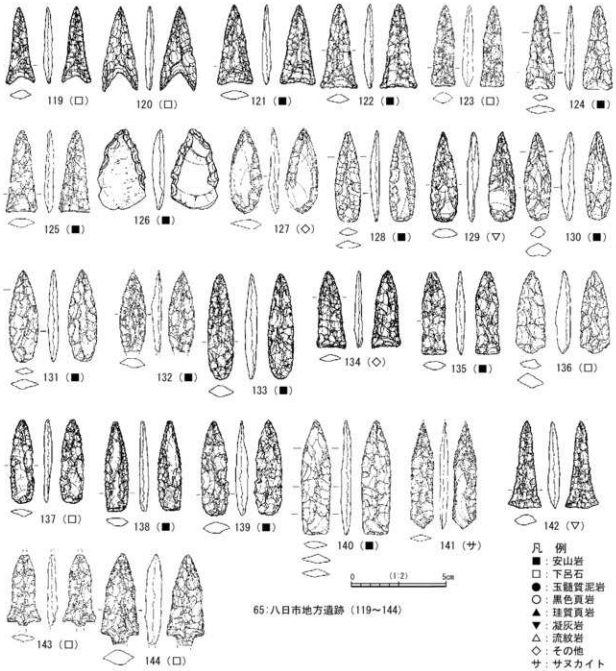
第３図　能登・北加賀地方の長い石鏃



第４図　北加賀地方の長い石鏃



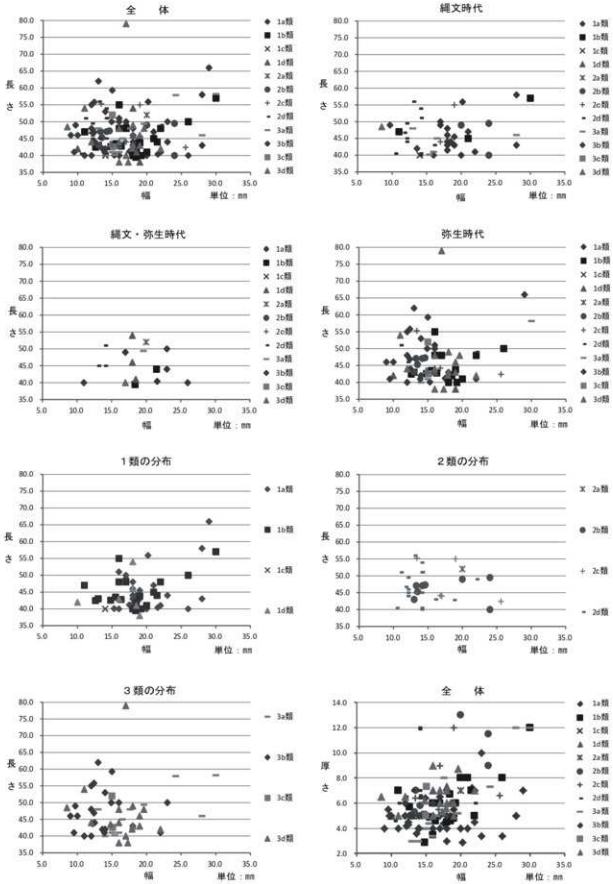
第５図　北加賀・南加賀地方の長い石鏃



第６図　南加賀地方の長い石鏃

	市町名	番号	遺跡名	報告書号	石材	形態	時期	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	珠洲市	1	高波フルヤ	26第1	珪質頁岩	1a	縄	44	18	5		
2		2	北方光真寺	60第13	珪質頁岩	1b	縄	57	30	12	16.9	
3	能登町	3	真脇	56第1-35		1a	縄	44	18	5		
		4	真脇	56第1-35		1a	縄	42	19	5		
		5	真脇	56第1-24		1a	縄	43	28	5		
		6	真脇	60第35-6	珪質頁岩	2b	縄	40	24	9	16.8	
4	穴水町	7	曽福	59第1	安山岩	3a	縄	(46)	(13)	3	(2.0)	
5	輪島市	8	道下元町	71第1		3a	縄	46	28	12		
		9	道下元町	71第2	アブライト	3b	縄	42.0	13.6	3.6	2.15	
6		10	鵜山	13第21	安山岩	1a	縄	46	18	4		
7	七尾市	11	三引	67第41	珪質頁岩	1a	縄	39.5	18.4	6.7	3.9	
8		12	千野高塚古墳	14第1	安山岩	1b	弥	48	16	3.5	2.11	サヌカイト?
		13	三室まどかけ	76第18	安山岩	3b	縄弥	50	23	10		
10		14	久江ツカノコシ	57第60	玉髄質頁岩	3d	弥	46	19	6	3	
11		15	徳丸	36第13	下呂石	3d	弥	43.5	14.8	6.2	2.8	
		16	徳丸	36第14	下呂石	3d	弥	42.1	17.9	5.6	3.1	
12	中能登町	17	杉谷チャノバタケ	24第111	安山岩	3d	弥	54	11	5	3	
		18	杉谷チャノバタケ	24第113	黒色黒曜岩	3d	弥	49	18	6	2.8	
		19	杉谷チャノバタケ	24第113	赤色玉髄岩	3d	弥	44	16	9	4.6	
		20	杉谷チャノバタケ	24第116	安山岩	3d	弥	43	19	5	2.6	
13	田鶴浜町	21	山王丸山	60第15	安山岩	1a	縄弥	44	23	3.4	2.1	
		22	山王丸山	60第14	安山岩	1a	縄弥	40	23	3.4	2.4	
14		23	徳田宮前	24第89	安山岩	3b	弥	50	16	6	4.1	稀石安山岩
15	志賀町	24	福井カミヤ	55第428	安山岩	2a	縄弥	49.4	19.6	5.2	2.29	
16		25	米流	15第8	黒曜岩	3d	縄弥	46	18	7.3	3.2	
17		26	代田宮西	24第1	安山岩	3a	弥	58.2	30.0	12.0	(17.8)	
		27	代田宮西	24第2	安山岩	3b	弥	40.0	19.2	6.0	3.4	
18	羽咋市	28	西崎・次場	13第224	安山岩	1b	弥	41	20	8	4.9	
19		29	東約場タケノハナ	12第15	安山岩	1b	弥	41.2	17.5	4.4		
20	宝達久町	30	竹生野	15第24	安山岩	1b	弥	48	22	5		
21	かほく市	31	中須ロ	44第9	玉髄質頁岩	1a	縄	55.9	20.2	2.9	2.8	
22		32	上山田貝塚	60第6	安山岩	3a	縄	41.0	16.0	3.4	2.6	
23	津幡町	33	七野場遺跡	22第8	下呂石	3d	弥	48	16	8		
24		34	近岡	17第8		2d	縄弥	45	13	5		県1995
		35	近岡	17第9		2d	縄弥	45	14	12		県1995
25		36	戸水C	19第2		1d	弥	(3.8)	19	6		県1968
27		37	戸水C	19第6		2d	弥	44	12	5		県1968
28		38	戸水B	16第25	安山岩	2d	弥	46	12	5	2	県2004
29		39	大玄A	43第269	安山岩	3b	弥	55.0	16.0	6.0	4.2	
		40	大玄A	43第266	安山岩	3b	弥	42.0	13.0	5.0	2.62	
		41	大玄G	20第897	黄瑞T	3b	弥	62.0	13.0	5.0	4.50	民色
		42	大玄西	19第24		3b	弥	(46)	10	5		市2002
		43	直江北	56第28	安山岩	3b	弥	43	13	5.0	2.50	市2014
		44	直江北	10第31	玉髄?	3b	弥	43	18	5.0	2.32	市2014
		45	直江北	10第32	安山岩	3b	弥	46	9	4.0	1.74	市2014
		46	直江北	10第33	安山岩	3b	弥	42	10	5.0	2.50	市2014
		47	直江北	96第31	安山岩	3b	弥	(36)	16	5	2.12	市2016
30		48	最田・寺中	12第21	安山岩	3b	弥	42	14	4		市2015
32		49	最田西道跡群	65第9-50	安山岩	3b	弥	52	15	5	3.8	県2006
33		50	最田B	70第128	安山岩	3b	弥	41	22	4.5	2.05	県2003
34		51	最田C	67第1	安山岩	1b	弥	48	17	6	6.0	市2004
		52	最田E	59第148	安山岩	3b?	弥	48	12	5	3.5	県2004
金沢市		53	最田C	59第152	安山岩	3d	弥	42	22	7	3.7	県2004
35		54	二ツ屋町	22第6		3b	弥	42	14	4	2.4	
36		55	横江B	68第13	安山岩	1b	弥	41	8.5	5.5	2.2	県2001
		56	横江C	12第82	安山岩	2d	弥	51	11	6	2.72	県2001
37		57	横江C	26第37	安山岩	3b	弥	53	12	6	4.11	市1994
		58	横江C	65第442	下呂石	3a	弥	50	15	4	2.5	県2002
		59	横江C	14第87		3d	弥	43	18	7	4.09	県2001
38		60	下安原	86第8		3d	縄弥	40	17	6	4	
39		61	上安原	155第1006	下呂石	3b	弥	53	14	5	3.9	
		62	上安原	155第1005		3b	弥	48	13	4	2.16	
40		63	中間サワ	107第944	下呂石?	1a	縄	40	16	4	2.3	県2009
		64	中間サワ	58第391		1b	弥	40	18	4.5	2.89	県2007
		65	中間サワ	107第960	安山岩	2d	縄	40	14	7	4.2	県2009
		66	中間サワ	156第1065		2d	弥	(49)	(22)	6	8.21	市2007
		67	中間サワ	127第1446	下呂石	3d	弥	44	12	6.5	2.4	市2007
41		68	下福電力ウラヤグ	25第162	安山岩	3b	弥	40.0	12.0	5.0	2.37	
		69	下カモリ	34第200	安山岩	1a	縄	41	22	5	5.5	
		70	下カモリ	30第52	玉髄質頁岩	3d	縄弥	(46.5)	8.5	6.5	(2.6)	
42		71	下カモリ	29第18	安山岩	3d	縄弥	(49)	9.7	5	(2.6)	
		72	下カモリ	32第145	安山岩	3d	縄弥	49.5	12	6.5	2.9	
43		73	新保本町西	25第5	安山岩	3a	弥	41	15	6	3.30	市1993
44		74	押野西	22第8		1b	弥	50	26	8	9	
45		75	北塚	70第10	白色凝灰岩	1a	縄	40	14	5		市1998
46		76	笠舞A	62第21	流紋岩	1a	縄	49	17	4	2.1	市1981
		77	笠舞A	26第4	凝灰岩	1a	縄	(43)	18	3	(2.5)	県1979
		78	笠舞A	62第20	安山岩	1a	縄	40	20	4	2.5	県1981
47		79	御経塚	6・22第49	安山岩	1a	縄	48	18	7	3.1	県1984
		80	御経塚	144第194	玉髄質泥岩	2d	縄	40.2	15.4	4.4	1.8	県2003
		81	御経塚	6・22第72	安山岩	3a	縄	(45)	16.5	5	(2.8)	県1984
		82	御経塚	144第230	玉髄質泥岩	2d	縄	40.5	14.0	11.9	4.6	県2003
		83	御経塚	6・21第41	玉髄質泥岩	2d	縄	43	16	6	3	県1984
		84	御経塚	144第226	玉髄質泥岩	2d	縄	(40.5)	10.4	4.6	(1.6)	県2003
		85	御経塚	6・21第2	安山岩	2d	縄	(44)	12	6	(3.2)	県1984
野々市市		86	御経塚	165第31	玉髄質泥岩	2d	縄	42.8	18.7	5.5	2.0	県1989
		87	御経塚	165第30	玉髄質泥岩	2d	縄	46.7	11.7	4.9	2.5	県1989
		88	御経塚	144第227	安山岩	2d	縄	51.1	14.1	6.6	4.6	県2003
		89	御経塚	144第226	玉髄質泥岩	2d	縄	53.9	14.0	6.4	4.4	県2003
		90	御経塚	6・21第1	流紋岩	2d	縄	56	11	7	4.7	県1984
48		91	押野タテナカ	59第1	安山岩	1b	縄弥	44	21.5	7	6.7	県1989
		92	押野タテナカ	49第1	玉髄質泥岩	1d	縄弥	41	18.5	6	2.3	県1989
		93	押野大塚	62第174	安山岩	3b	縄弥	40	11	4	1.5	市2011
49		94	末松廃寺	96第3	安山岩	1d	縄弥	54	18	7	3.9	県2000
50		95	野本	97第302	安山岩	1d	弥	43	16	7	3.1	県1993
51		96	八田中ヒエモンダ	16第60	安山岩	2d	縄弥	51	14	5	3.0	
		97	乾	12第94		3a	縄弥	41.9	24.2	7.3	8.4	県2010
52	白山市	98	乾	138第379	安山岩	3a	縄弥	48	17.6	8	5.5	県2001
		99	乾	138第371	輝石凝灰岩	3a	縄弥	52	20	7	6.5	県2001
53		100	福岡	49第9	チャート	2d	縄	(45)	12	6	2.4	
54		101	福岡	49第11	玉髄質泥岩	2c	縄	44	17	9	6.4	
55		102	下古谷		下呂石	1b	弥	42.6	14.8	2.9	1.5	
56		103	庄示屋敷C	202第1	安山岩	1a	縄	47	21	4	3.0	
57	鶴来町	104	新生	82第1	石英粗基岩	2	縄	(45)	15.6	4.3	2.4	
58		105	牛島ウハシ	44第2	安山岩	1a	縄弥	49	17	5	5.0	
59		106	白江横川	21第390	安山岩	3d	弥	79	17	7	8.4	サヌカイト?
60		107	長田南	22第15	流紋岩	1a	弥	(51)	(16)	5	3.5	
61		108	大長野A	99第96	硬質頁岩	1a	縄弥	40.4	21.6	7.2	5.1	
62	小松市	109	大谷高校	31第1A8		1d		55	19	12		
		110	六橋	93第3	流紋岩	1a	縄	42	19	6	2.4	
		111	六橋	93第2	流紋岩	1b	縄	45	21	8	6.0	
		112	六橋	93第1	黒色黒岩	1b	縄	45	18	7	4.0	
		113	六橋	94第36	流紋岩	2b	縄	49	20	13	15.4	
63		114	藤ノ木	38第20	長石	1a	縄	41.5	18	5.0	2.9	
		115	藤ノ木	38第21	長石	1a	縄	44	18.5	5.0	2.1	
64	加賀市	116	藤ノ木	38第22	長石	1a	縄	45.5	19	5.5	3.9	
		117	藤ノ木	38第8	安山岩	1a	縄	50	17	6.5	8.5	
		118	藤ノ木	39第113	玉髄岩	2b	縄	49.5	24	11.5	10.4	
65	小松市	119	八日市地方	46第274	安山岩 b	1a	弥	40.1	15.3	4.9	1.8	市2013
		120	八日市地方	77第74	下呂石	1a	弥	66.0	29.0	7.0	2.3	県2004
		121	八日市地方	44第343	安山岩	1b	弥	42	16.5	4.6	2.79	市2013
		122	八日市地方	45第367	安山岩	1b	弥	43.8	19	4.8	2.81	市2013
		123	八日市地方	189第51	下呂石	1b	弥	42.5	12.6	5.7	2.44	市2003
		124	八日市地方	44第244	安山岩	1b	弥	43.4	15.5	4.9	2.5	市2013
		125	八日市地方	189第40	安山岩	1b	弥	42.8	16.3	4.6	2.67	市2003
		126	八日市地方	77第61	安山岩	2c	弥	42.4	25.6	6.6	7.2	市2004
		127	八日市地方	184第8	黒色黒岩	2b	弥	44.7	16.8	5.5	3.42	市2003
		128	八日市地方	46第362	黒色黒岩	2b	弥	47.1	13.2	5.3	2.99	市2013
		129	八日市地方	46第381	流紋岩	2b	弥	47.1	14.2	5.8	3.19	市2013
		130	八日市地方	46第379	安山岩	2b	弥	45.3	13.5	7	3.54	市2013
		131	八日市地方	46第380	安山岩	2b	弥	47.3	14.8	5.1	3.49	市2013
		132	八日市地方	184第5	安山岩	2	弥	(42)	14.1	5.3	(2.63)	市2003
		133	八日市地方	46第377	安山岩 b	2c	弥	55.5	13.4	6.4	4.77	市2013
		134	八日市地方	46第372	珪質岩類	2d	弥	44	12	6	3.1	市2013
		135	八日市地方	46第376	安山岩 b	3b	弥	(44)	12.5	5	2.49	市2013
		136	八日市地方	45第365	下呂石	3c	弥	42.6	15.1	7.3	4.42	市2013
		137	八日市地方	45第370	下呂石	3b	弥	43.7	12.2	4.2	2.15	市2013
		138	八日市地方	46第383	安山岩 b	3b	弥	46.9	12.4	4.5	2.91	市2013
		139	八日市地方	46第378	安山岩	3b	弥	50	14.9	6.4	4.4	市2013
		140	八日市地方	45第364	安山岩	3b	弥	59.3	15	5.1	4.64	市2013
		141	八日市地方	190第54	サヌカイト	3b	弥	55.8	12.4	4.3	3.93	市2013
		142	八日市地方	45第366	流紋岩		弥	46	17	6.4	2.71	市2013
		143	八日市地方	190第62	下呂石	3d	弥	(28)	17.3	5.3	(2.3)	市2003
		144	八日市地方	189第8	下呂石	3d	弥	(46)	19.6	8.7	(6.86)	市2003

表1　石川県の長い石鏃集成


全　体
縄文時代
縄文・弥生時代
弥生時代
１類の分布
２類の分布
３類の分布
全　体
長さ
厚さ
幅
単位：mm
1a類
1b類
1c類
1d類
2a類
2b類
2c類
2d類
3a類
3b類
3c類
3d類

第７図　長い石鏃の分布

では17～22㎜に集中する。1ｂ類は縄文３点：縄文・弥生２点：弥生15点であり、圧倒的に弥生が多い。弥生では幅15～22㎜に集中する。1ｃ類は縄文１点である。1ｄ類は縄文・弥生３点：弥生３点で、幅は16～19㎜に集中する。2a類は縄文・弥生１点（縄文晩期終末～弥生前期）がある。2ｂ類は縄文３点：弥生５点であり、長さは50㎜以下と共通するが、幅は縄文20～22㎜：弥生13～15㎜と時代により幅が狭くなる。2ｃ類は縄文２点：弥生３点（八日市地方遺跡）であり、幅は18㎜前後が多い。2ｄ類は縄文12点：縄文・弥生３点：弥生４点と縄文に多く、幅は11～16㎜に集中する。3a類は縄文５点：縄文・弥生３点：弥生４点であり、幅は13～20㎜に集中し、それを越えるグループ（24～30㎜）もある。3ｂ類は縄文２点：縄文・弥生２点：弥生20点であり、圧倒的に弥生が多く、しかも八日市地方遺跡７点と北加賀地方（金沢市沿岸部）11点に集中する。幅9～16㎜の細身が主体であり、22～23㎜は２点である。3ｃ類は弥生２点（安山岩と下呂石）が確認される。3ｄ類は17点中15点が弥生であり、幅は14～20㎜に集中する。縄文の70は幅９㎜と細くて稜も弱く別な形式とした方が良いのかもしれない。長さは、79㎜（109）以外は40～50㎜に集中する。

厚さは８㎜までに集中する傾向がある。８㎜を越えるものは縄文６点、縄文・弥生２点、弥生前期１点、弥生２点であり、縄文から弥生前期までが多い。形態的には2ｂ類３点（縄文）、2ｃ類２点（縄文）、3ｄ類２点（弥生）がある。

15・16・33・106・143・144は、五角形長身鏃（石黒1993）や朝日型長身鏃（中村1996）と思われ、106はサヌカイト？、他は下呂石であることからも、東海地方西部から搬入された可能性が高い。20は有茎部が20㎜と異常に長く、県内には類例はない。大阪府瓜生堂遺跡（大阪府立弥生文化博物館2007）に類例を確認したが、搬入品であるかは判断できない。

在地系石材は、安山岩70点が圧倒的に多く、縄文では15点中1a類６点：2ｄ類５点が多い。縄文・弥生では10点中1a類３点：3a類２点：3ｂ類２点である。弥生では、37点中1ｂ類11点：3ｂ類13点：3ｄ類６点が多く、基部の分類ではｂ類（平基）が27点73％を占める。しかし、在地の輝石安山岩は、慣例的に名称を与えているだけであり、サヌカイトの可能性もあるので在地比率は少なくなる可能性があろう。

玉髄質泥岩は11点中縄文９点：縄文・弥生１点：弥生１点であり、縄文では2ｄ類５点が多い。玉髄質泥岩は原産地に近い真脇遺跡でも多く存在（高田氏教示）し、加賀地方まで運ばれている。弥生時代の久江ツカノコシ遺跡（14、3ｄ類）は新潟県地方から搬入された可能性を想定したい。珪質頁岩は４点全て能登地方で縄文３点である。流紋岩は９点中縄文５点：縄文・弥生１点：弥生３点であるが、縄文・弥生の25以外は加賀地方での出土である。凝灰岩３点は全て北加賀地方で縄文から弥生前期までに収まる。

外来系の石材は、サヌカイト・下呂石がある。サヌカイトと確認されたものは少ないが、分析や表皮観察や磁力検査により今後増える可能性があろう。下呂石は13点あり、12点が弥生の３類である。縄文の63（1a類）は中屋サワ遺跡出土であり、弥生時代の遺構も多い事から弥生時代の可能性もある。下呂石は、長い石鏃でなければ、七尾市三引遺跡の縄文時代早期末～前期初頭の第１貝塚から６点出土が確認（金山ほか2004）されている。

５．まとめにかえて

石川県の長い石鏃を纏めてみたが、弥生の長身鏃について論考するまではほど遠いものである。集成するのに時間がかかったこともあるが、輝石安山岩とサヌカイトの識別や石材名の未記載や計測値などに問題が多い事を痛感した。縄文時代全体では長さ50㎜以下で幅12～15：17～22㎜に集中し、形

態的には1a類が多い。弥生時代全体では、12～20㎜（13・15・18㎜前後）に集中し、縄文よりやや細身になる。形態的には1b・3b・3d類が多い。今回は上記の傾向が伺えた。

図版の出典報告書が多いので、市町別に簡単にまとめた。県・市・町・村は教育委員会を省略、県立は石川県立埋蔵文化財センターを省略、財・公は財団・公益財団石川県埋蔵文化財センターを省略した。

本稿をまとめるにあたり、赤沢徳明、下濱貴子、高田秀樹、永井宏幸、西田昌弘、原田　幹、宮田明、山川史子の協力を得た。敬称省略。

参考文献

石川県農林水産部耕地整備課　1986　『土地分類基本調査　小松』

石黒立人　1993　「弥生時代の石器」『朝日遺跡Ⅳ』　愛知県埋蔵文化財センター

大阪府立弥生文化博物館　2007　『稲作とともに伝わった武器』

金山哲哉ほか　2004　『三引遺跡Ⅲ（下層編）』石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター

高田秀樹・大安尚寿・砂上正夫・古西里美・大屋道則　2008　「真脇遺跡出土の玉髄質泥岩類とその産地」『研究紀要第23号』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

西田昌弘　2005　「小結」『だいじょう寺畑遺跡』石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター

図版出典文献

珠洲市　市1976『珠洲市史　資料編自然・考古・古代』・2004『中野錬次郎採集遺物報告書』　**能登町**　能都町1986『真脇遺跡』・2002『真脇遺跡2002』　能登町2006『真脇遺跡2006』　**穴水町**　町1980『曽福遺跡』　**輪島市**　県立1985『道下元町遺跡』

七尾市　中島町1990『殿山遺跡』　七尾市1986『千野高塚古墳』　財2003『三引遺跡Ⅱ（上層編）』・2000『三室福浦Ｂ遺跡・三室まどかけ遺跡』　**中能登町**　県立1995『谷内・杉谷遺跡群』　財2003『久江ツカノコシ遺跡』・2004『徳丸遺跡』

志賀町　富来町1994『山王丸山遺跡』　志賀町1981『代田営団遺跡』　財2008『米浜遺跡』　公財2015『徳田宮前遺跡』・2017『福井ナカミチ遺跡』　**羽咋市**　県立1987『吉崎・次場遺跡第１分冊』　財2004『東的場タケノハナ遺跡』　**宝達志水町**　県立1988『竹生野遺跡』　**かほく市**　宇ノ気町1979『上山田貝塚』　高松町1987『中沼Ｃ遺跡』　**津幡町**　町2010『七野墳墓群』

金沢市　市1981『笠舞遺跡』・1984『チカモリ遺跡―石器編』・1987『押野西遺跡』・1990『下安原遺跡』・1992『新保本町西遺跡』・1994『藤江Ｂ遺跡（第２次）』・1998『北塚遺跡―第14次』・2002『大友西遺跡Ⅱ』・2003『大友西遺跡Ⅲ』・2003『上安原遺跡Ⅱ』・2004『畝田Ｂ遺跡・畝田Ｃ遺跡』・2007『中屋サワ遺跡Ⅲ』・2009『中屋サワ遺跡Ⅳ・下福増遺跡Ⅱ・横江荘遺跡Ⅱ』・2014『直江北遺跡』・2015『畝田・寺中遺跡Ⅹ』・2016『大友Ａ遺跡・大友Ｄ遺跡・大友Ｆ遺跡・大友Ｇ遺跡』　県1979『笠舞Ａ遺跡』　県立1986『戸水Ｃ遺跡』・1995『近岡遺跡』・1998『二ツ屋町遺跡』　財2000『戸水Ｂ遺跡（10・12・13次）』・2001『藤江Ｂ遺跡Ⅱ』・2001『藤江Ｃ遺跡Ⅰ』・2002『藤江Ｃ遺跡Ⅳ・Ⅴ』・2003『畝田・無量寺遺跡、畝田Ｂ遺跡』・2004『畝田Ｂ遺跡・畝田Ｃ遺跡・無量寺Ｃ遺跡』・2006『畝田西遺跡群Ⅲ』　公財2016『大友Ａ遺跡・大友Ｅ遺跡・直江西遺跡・直江北遺跡』　**野々市市**　野々市町1983『御経塚遺跡』・1989『御経塚遺跡Ⅱ』『押野タチナカ遺跡・押野大塚遺跡』・2003『御経塚遺跡Ⅲ』・2011『押野タチナカ遺跡・押野大塚遺跡2』　財2000『末松遺跡群』　**白山市**　県立1985『白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）』・1990『八田中遺跡群』・1993『野本遺跡』　財2001『乾遺跡』・2010『乾遺跡』　河内村1987『福岡遺跡』　**能美市**　辰口町1978『茜生遺跡』　寺井町1999『牛島ウハシ遺跡』　財1999『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』　**小松市**　市1998『長田南遺跡』・2003『八日市地方遺跡Ⅰ』・2013『八日市地方遺跡Ⅱ―第１部遺構編・第２部石器編』　北陸大谷高校1968『北陸大谷高等学校地歴クラブ紀要第３号』　県立1989『白江梯川遺跡Ⅱ』・1997『六橋遺跡』　財2004『八日市地方遺跡』・2014『大長野Ａ遺跡』　**加賀市**　市1985『藤ノ木遺跡』

「与野評」刻書平瓶再考

和田　龍介

1．はじめに

表題の刻書平瓶は、須恵器平瓶の肩部に「与野評」で始まる６行の文字が線刻されたもので、古墳時代末の須恵器窯である那谷金比羅山窯跡群（第３次調査、1984年）から出土したものである。古代国郡里制の前身形態である「評」制の実在を表すものとして出土時から評判の高かった資料であるが、出土の翌年に調査概要にて釈文・実測図が公表されて以降、「与野評」のみが一人歩きをしている状況であった。この間、釈文の解釈などの研究が深化していないことを見ると、研究者の熟覧観察をあまり得ないままになっていたのではと予想される。

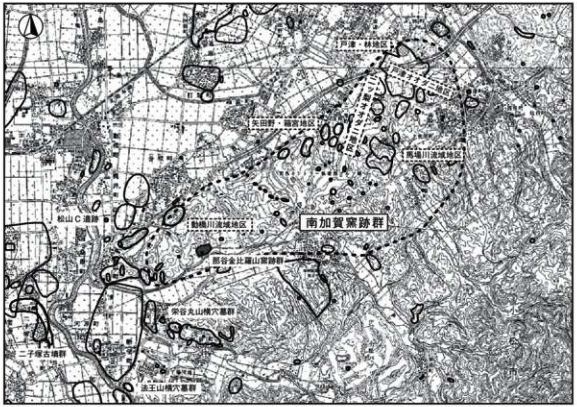
本資料は長く石川県立歴史博物館で展示に供されてきたが、平成27年の全面的なリニューアルに伴って石川県埋蔵文化財センターに里帰りしてきた。出土後約30年を経て、土器の接合や補強の劣化も見られたことから修復作業が行われ、筆者はその際に詳細に観察する機会を得た。その結果、報告書釈文についても一部見直す必要があるのではないかとの思いに至り、詳細に考察されてこなかった部分についても検討を加えて筆を起こした次第である。

2．小松市那谷金比羅山窯跡群と刻書平瓶の概要

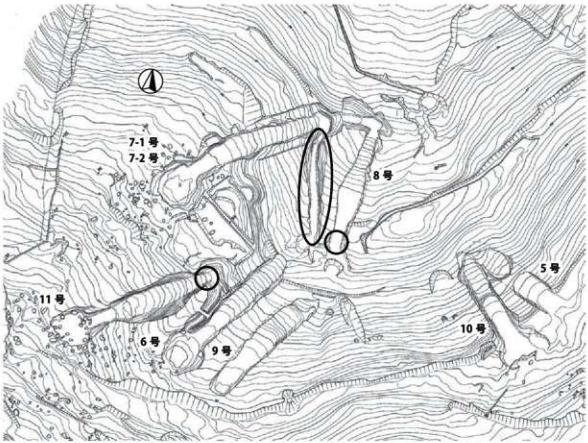
那谷金比羅山窯跡群は、石川県小松市那谷町に所在する須恵器窯跡群である。小松市粟津町～加賀市分校町にかけて帯状に広がる低丘陵には、古墳時代後期～古代の須恵器窯跡群である「南加賀窯跡群」が展開し、本窯跡群はその一角をなすものである。南加賀窯跡群は本県最大級の須恵器窯跡群であり、６世紀初頭から10世紀前半代までの操業が確認されている。那谷金比羅山窯跡群は南群（動川流域地区）に属する（第１図）。

本窯跡群は昭和57年度～59年度に、石川県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、通称「金比羅山」の南側一帯に、６世紀末～７世紀後半に操業した計12基（内２基は築造途中で放棄）の窯体を確認した。当地を含む南加賀地域の広域編年（三湖台編年）を確立した望月精司は、南加賀窯跡群では７世紀代に大規模な須恵器生産の再編が行われたとし、那谷金比羅山窯跡をその嚆矢として、最も古い１号窯を飛鳥編年Ⅰ期併行、田嶋明人編年（以下「田嶋編年」）Ⅰ１期古段階に位置づけている。須恵器窯が操業を終えた後には墓域として用いられたようで、北陸では唯一の事例となる横口式石槨を埋葬施設に用いた那谷金比羅山古墳が築造される。古墳の年代観は７世紀末～８世紀初頭（田嶋Ⅱ３期、飛鳥Ⅴ期併行）とされている。付近一帯は奥津城として認識されていたようで、６世紀末～７世紀末の法王山横穴墓群、栄谷丸山横穴墓群などが営まれる。本古墳の被葬者像は明らかでないが、畿内にルーツを持つ横口式石槨を採用していることや、古墳の造営そのものが稀な時期に築造されていることなどから「七世紀に畿内から江沼に来た氏族の後裔であり、（中略）冠位は五位程度の中級官人層」[1]、「江沼評設置を前提とする７世紀前半代の移民主体集落の形成、手工業生産再編を主導した人物」[2]と推定されている。いずれにせよ、本窯跡群の建窯・運営を主導した人物であることに疑いない。その人物が江沼評造であるかは議論が分かれようが、『常陸国風土記』に見える建評申請者（いわゆる「立郡人」）が二名あり、一名は国造氏以外の例が見られることからあながち可能性がないとは言えないだろう。

刻書平瓶は、検出された窯体ないし灰原などの遺構につくものではなく、「８号窯焚口埋土（流込土）を中心に、7-1号窯の溝状遺構流込土、11号窯煙道部埋土（流込土）から出土した約10片の破片を接



第１図　遺跡の位置と南加賀窯跡群の分布



第２図　5～11号窯と平瓶出土地点

0 (1:3) 20cm

（実測図・拓本とも註23①文献）

藤原宮木簡「与射評」（藤1-179号）

法隆寺金堂薬師如来坐像光背銘「与」（早大図書館蔵拓影）

与野評□□
□〔羽カ〕□
□□
□□□
阿皮田□〔有カ〕
□〔佐カ〕羅甘

平城宮木簡「□野」（平城宮1-56号）

伊場遺跡「有」（伊場12-61号）

第３図　刻書平瓶実測図（S＝1/3）と刻書拓影（S＝1/1）

合しており、焼成した窯は判然としない」とある[3]。焼成後何らかの意図で使用されてから廃棄されたものと理解できる。第２図は第３次調査の５号～11号窯の平面図に８号窯焚口･7-1号窯溝状遺構･11号窯煙道をプロットしたものである。廃棄の時期は、３基中最も新しい窯である８号窯の廃絶後（田嶋編年Ⅱ１期）をさほど下らない時期に求められよう。器種は須恵器の平瓶で、底部に丸みを持つ半球胴型の体部に小さめの注口がつく。把手はない。体部下半には回転ヘラ削りを残し、上半はカキメ調整が施される。焼き歪みのない焼成良好品である。当須恵器の編年観については､「概要」では「７世紀中葉頃」とし、報告書では窯体や灰原等、窯についていないためか言及を避けている[4]。北野博司[5]は、田嶋編年古代Ⅱ期以降では見られない特徴を持つことからⅠ２期に位置づけ、飛鳥Ⅱ期併行とする。望月精司は前出の三湖台編年において、２Ａ期の暦年代根拠資料として当須恵器をあげている。２Ａ期は古代Ⅰ２期に相当することから、古代Ⅰ２期に本平瓶を位置づける点は変わらない。暦年代については､北野･望月とも「評」字から650年を定点とする時期（７世紀中頃）と見ているため、刻書を抜きに型式学的に位置づけた場合[6]、北野は飛鳥Ⅱ期に、望月は後続する２Ｂ期を陶色 TK217 号窯（７世紀第３四半期）に対比することから、本稿では「7世紀第２～３四半期に型式的に位置づけられる」平瓶としておきたい。

３．刻書の検討

刻書は、平瓶の肩部の注口の無い部分に６行に渡って刻まれる、１行目が２字ほど高く、注口の右隣で始まるが２行目以降は注口を軸に､時計回りに刻まれている。図等で見るよりもはるかに小さく、細いものというのが第一印象であった。極めて先端を鋭利にしたヘラ状の工具で焼成前の、刻線の両脇や端部に盛り上がる粘土を観察すると生乾きに近いタイミングで刻まれていることがわかる。残念なことに刻字の半分ほどが破片として失われており、全体の文意をとることは困難である。

釈文は調査概要（以下「概要」）で示されたものと、発掘調査報告書（以下「報告」）で改められたものの２つがある。結論から先に言うと、私案は基本的に「報告」の提示した釈文とほぼ異同はなく(字の欠損に伴う記号表記は改めたが)、解釈において字の推定を補ったに過ぎない。はじめに私案を示し、両者と対比させながら検討を進めて生きたい。釈読表記は木簡学会型式に準じた。

〔１行目〕与野評□□と釈読する。「概要」では箱入りの「与」であったが､「報告」では読み切っている。「与」は１･２画目が「卜」でなく「十」となって１画目が２画目を突き出す形となっており、筆順は縦→横である。線刻では誤って突き抜けたというよりは、確信的に「十」とする。おそらくここが「与」の字体と合わないことから「概要」では□に字を入れたものと推察される。「木簡画像データベース」[7]等字書類ではいずれも横画が突き出たものはないが、３画目以降は「与」に通有の体である（同時代資料として、第３図法隆寺金堂薬師如来坐像光背銘[8]、藤原宮木簡[9]参照)。他に相当する字画の漢字も見当たらず、文意からもここでは「与」としておきたい。２字目「野」は一見して採りづらいが、旁が「予」でなくオオザトのような形状となるのは木簡でよく見られ、偏の「里」をこのように崩すのは平城宮木簡[10]に類例がある。３字目は下半部を欠損するが､偏は「言」に､旁は「平」を認めることができ、「評」と読める。以下は欠損しているが、下方に横画の残画が２箇所確認でき、スペースから２～３字は続いていたものと推定される。

〔２行目〕□〔羽ヵ〕□ と釈読する。１字目の上半部を残し以下は欠損。報告書･概要ともに□〔須ヵ〕とする。１・２画目の点は左上→右下に筆が進められており、須であれば筆が逆となる。「須」と採るのは難しく、「羽」のような字画の文字が想定されるが読み切れない。以下、文字が続くことが予想されるが、３行目ともに下が大きく欠損しており不明である。

〔3行目〕□ 𠂉 とする。右上→左下に続く斜画が2本確認されたが以下は不明。

〔4行目〕□□ 𠂉 とする。2字目までが認められるが2字とも字の右半部を欠損しており、判読できない。

〔5行目〕阿皮田□〔有カ〕 と釈読する。すべての字がのこる唯一の行である。「概要」では「阿□波田有」と釈読し、「報告」で「阿皮田□〔有カ〕」と変更された。1字目は「阿」字のコザトが旁にくっついてしまっているが、このような字体は木簡にも見ることができる。「何」字の可能性も検討したが、「阿」字としておきたい。2字目は土器の割れ口にあたり字画を取るのが難しい箇所であったが、修復のために割れを外して再接合したところ、改めて報告書のとおり「皮」とするのが妥当であるとの結論に至った。3字目は「田」で疑いない。4字目は「有カ」とする。1画目の払いが弱いこと、書き順が横画→払いの順になっていることを除けば「有」字である蓋然性は高い。また静岡県伊場遺跡第61号木簡[11]「若倭部小刀自女病有依（符籙）」から字面的には「有」とするのが妥当であるが、文意が不明なことと後述する解釈の点から「百」の可能性を提示しておきたい。他に「直」と読み氏族名とみる解釈もある。その根拠は、「概要」で4字目の下に残画を取っており、これを「直」字の最終画と取ったことによるものだろう。改めて確認したところ字の刻みと比較すると浅く、もともとか後代に起因する傷である可能性が高いことから残画としない「報告」を妥当としたい。

〔6行目〕□〔佐カ〕羅廿 と釈読する。3文字が確認できる。1字目は□として「佐」字を推定する。残画に右斜め上→左斜め下に入る筆があり、佐とはとれない可能性もあるが、推定で補っておきたい。2字目はかなり崩れてしまっているが、「羅」字でよかろう。3字目は「概要」では「女」と取る[12]が、「報告」では「廿」に修正する。ヘラ運びを見ると、1画目が「く」にならず筆はそのまま下方に流れていることが確認でき、「廿」ととった方が妥当である。

以上をまとめると、筆者の釈文案は第3図のとおりである。

4．内容の検討

出土当時、本平瓶を貴重ならしめたのは、①「与野評」という、後の郡名に連なる地名が出土文字資料として現れたこと、②評制施行の実年代に迫ることができる資料であったこと、の2点に尽きると思われる。しかし前述したように、地域史等において評制の実態を示す資料として紹介されながらも、刻書そのものについて研究は全く深められていないと言ってよい。土器研究者によって積極的に7世紀中頃の標識資料として用いられながら、肝心の暦年代を担保する刻書そのものについては等閑視されていたわけである。例えば7世紀代の文字資料は1970年代以降著しく増大したが、出土のほとんどは宮都とその周辺に限定されている。奈良文化財研究所が集成した評制下の荷札木簡[13]では、339点中実に326点が宮都地域（飛鳥・藤原、難波）で占められており、奈良・平安期以上の偏在ぶりである。それほど、7世紀代の文字資料は地方にとって存在が大きいはずであるが、本平瓶だけでなく、石川県下の7世紀代文字資料はほとんど注目されてこなかったといえる。

「与野評」を記紀や延喜式等に見える当地の地名である「江沼[14]・江渚[15]（エヌ、エヌマ）」に比定することについては、今回改めて学史を漁ったところ言及された研究が少ない。「概要」で「後の江沼郡と関連する可能性が高いものと考えられる。（中略）与野→江沼と関連づけが許されるならば･･･」と仮説が提示された後は、『日本歴史地名大系』[16]（平凡社）、『古代地名大辞典』[17]（角川書店）等の、地名辞典の類で紹介されているのみであった。管見の限りで明確に本刻書と江沼を結びつけ論じたのは櫛木謙周[18]で、『釈日本紀』の引用する「上宮記」逸文（男大迹天皇（継体天皇）出自系譜）に見える「余奴」が「与野」と同調であり、古代の中部方言として「オ列乙類とエ列乙類の区別が明瞭さ

を欠いていた」ことから「「エヌ」を「ヨヌ」と記すことは十分にありうる」とした。また本逸文に詳細な史料批判を加えた黛弘道は「余奴」を「ヨヌ、ヨノ」と訓じ、江沼臣のこととし、逸文が推古朝期に遡りうる内容・表記を持つものとした[19]。名古屋市博本『和名類聚抄』では江沼を「エヌ」「ヨ子」と訓じ、時代にははるかに下るが『蔭涼軒日録』文明18年（1486）11月3日条に「米郡」と見える。加賀市松山C遺跡から多量に出土した9世紀代の「米」墨書土器[20]も報告書が指摘するように「江沼」の別表記ととらえることができ、在地でエとヨの通用していたことを示唆する一資料であろう。記紀以降の「エヌ、エヌマ」よりも「ヨヌ・ヨノ」の方が古訓である可能性がうかがえ、「江沼」字を充てられて以降も「ヨノ・ヨヌ」の訓が残っていたのであろう。

「評」については、出土時点で郡評論争はほぼ決着がついており、藤原宮木簡で「評」実態説が証明されて以降は、具体的に評制の施行をいつに求めるかについて議論が移っている。本刻書平瓶の価値は評制の施行時期について語ることができる資料ということになろう。今ここで評制について詳しく言及する能力は筆者にはないが、鎌田元一の説いた「基本的に孝徳朝における全面的な建評を認め」るのがほぼ定説となっていると理解する[21]。鎌田は『常陸国風土記』や他書に引く立評記事の分析をとおし、大化5年（649）に全国規模で評が成立したと主張した。本平瓶の定点を7世紀中頃に置く根拠はこの大化5年全面建評説に拠っており、須恵器の編年観から見ても、遅くとも7世紀第3四半期までには国造のクニが評へ移行する「国造系コホリ」が実態として成立していたことを裏付ける資料である。石神遺跡出土木簡「乙丑年十二月三野国ム下評」（665年）と並んで評制の最古級の出土資料として評価できよう。門脇禎二は本平瓶を積極的に位置づけ、評制が「「大化改新」以前に、越の特定地域にも実施されていた可能性」を指摘する[22]。門脇はその前提として、①本平瓶が7世紀第2四半期の土器として編年されていること、②欽明紀31年四月乙酉条に見えるような、江沼臣とヤマト政権・蘇我氏との深い関わりをあげ、中央政府と現地首長との密接な関係をはじめ条件の整った地域から評制が施行されていったとする。しかし平瓶そのものは大化前代を担保するものではなく、文献史学からも、評制の施行は大化5年を起点とするか5年にこだわらず漸次施行されたかの2説にほぼ収斂されており、門脇説はやや行きすぎた嫌いがあろう。さて、7世紀代に遡りうる「評」出土資料は、本簡を除くと須恵器刻書7点、瓦刻書2点、同墨書1点、（表[23]）。その傾向を見ると、記される評名と出土地が一致しないものや瓦といった収取体制をうかがわせるものが目立つ。また、ヘラ書きで記されるものがほとんどで、ヘラ書きされるということは、作成時点（焼成前）に、須恵

	遺跡名	遺跡の性格	器種	釈文	令制郡名	記載方法	時期	備考
①	那谷金比羅山窯跡群	須恵器窯跡	須恵器平瓶	与野評〔 〕 □〔須ヵ〕× □× □□× 阿支田口〔有ヵ〕 □麻甘	加賀国江沼郡	ヘラ書き	7世紀中頃	本報告資料
②	久米高畑遺跡	久米詳衙	須恵器中壷	久米評	伊予国久米郡	ヘラ書き	不明	第7次調査
③	出土地不明		須恵器台付細頸壺	馬評	伊予国宇麻郡か	ヘラ書き	7世紀中頃	岡山県立博物館蔵
④	植松・池尻遺跡	碓氷郡家ないし野後駅家	須恵器有台坪蓋	評		ヘラ書き	7世紀第3四半期	
⑤	石神遺跡	官衙関連施設か	須恵器平瓶	三野国加々ム評〔 〕	美濃国各務郡	ヘラ書き	7世紀	第11次調査
⑥	藤原京跡	藤原京左京六・七条二坊	須恵器有台坪蓋	大鳥評	河内国大鳥郡	ヘラ書き	飛鳥IV (670～690)	
⑦	滝町F遺跡		須恵器円面硯	評首		ヘラ書き	7世紀後半	（新聞報道資料）
⑧	彩向寺遺跡	橘樹評衙付属寺院か	平瓦	无漏志国荏原評	武蔵国荏原郡	ヘラ書き	彩向寺変遷2期 (7世紀後葉～8世紀初頭)	橘樹官衙遺跡群
⑨	鳥坂寺跡	古代寺院	平瓦	志母乃五十戸 玉造マ部鳥評	河内国安宿郡	ヘラ書き	7世紀末	
⑩	藤原宮跡	藤原宮大極殿北方	丸瓦	□〔前ヵ〕玉評 大里評	武蔵国埼玉郡 大里郡か	墨書	7世紀代	第20次調査

表 「評」出土資料（木簡を除く）

器なり瓦の用途が限定されることであり、その意味において墨書行為とは分けて考えられなければならないだろう。収取物はまさに、その用途のために制作されるものであるから、ヘラ書きがほとんどを占めるのは不思議なことではない。刻書される器種はばらばらであるが、貢納される須恵器の内、代表的な器種に貢納元を刻書したと考えるべきであろう。

では、本平瓶はその中で理解されうるものなのか、異なる意図の元に刻書されたかを考えてみたい。まず窯跡という出土地の性格から、貢納品として当地に納められたものである可能性は低く、出土状況から貢納予定品であった可能性もまた低いと言えよう。本平瓶のように刻書される評名と出土地が一致するのは②「久米評」須恵器が見えるが、久米高畑遺跡は伊予国久米評衙比定地であることから、貢納先の地名を刻んだ可能性があり、これも貢納にかかる刻書と考えるべきである。「報告」ではその性格まで踏み込んでいないが、「概要」では、出土状態などから「生産活動にかかる祭祀行為に使用された」ものと推定し、その後伊藤雅文[24]や望月精司[25]も同様に、南加賀窯跡群の動態と平瓶を積極的に位置づける。筆者は平瓶が多分に祭祀的な器種[26]であり、出土状況から破片にして撒き散らした状況もうかがえることから、伊藤や望月と同じく儀礼的行為に用いられたと理解する。以上のような前提で釈文を解釈すると、1行目は与野評＋五十戸（サト）名ないし人名が入ることが予想される。その場合、下部の残画の横棒を「十」二画目ととらえるのは行きすぎであろうか。

「与野評」とならび、「阿皮田」をどう解釈するのかが本刻書のもうひとつの鍵となろう。訓は「アヒタ」か「アハタ」のいずれかであろうが、「皮」を「ハ」とすることについては近年の「歌木簡」[27]に見える「奈尓皮ツ」（なにはつ、石神遺跡・藤原宮）、「皮留久佐」（はるくさ、前期難波宮）のごとくであり、いずれも7世紀代のものである点も見逃せない。さて「アハタ」としたとき、「栗田（アワタ）」という地名ないしウヂ名が想定できる。地名とみた場合、栗田という地名は旧江沼郡域には残っていない。野々市市に栗田の地名が見えるが、郡域も異なりまた離れすぎていることから考えにくい。遺跡の北側に「粟津」という地名が残るが、周縁に「符津」などの地名もあることからタ→ツに転化したとは考えにくい。「アワタノツ」→「アワヅ」とも考えられなくもないが、牽強付会に過ぎるかもしれず、可能性の提示にとどめておきたい。ウヂ名とした場合、渡来系氏族とされる栗田忌寸・栗田直か、和珥氏の同族氏族である栗田朝臣があげられ、いずれも畿内に分布する氏族である。またそれらの部民であろう栗田部は若狭国三方郡域に分布していることが荷札木簡から読み取れるが、加賀国域には見られない。どちらとも決めがたいが、逆にどちらにとっても「有」以下の語の解釈に難を残し、現段階では保留としておきたい。

2～5行目は文意がとれず、そもそも一行完結（列記）なのか文章なのかも判然としない。刻書が平瓶の肩部にのみ刻まれ、かつ1～2字ほどの余白を残して行が変えられていることから一行完結、つまりリストのように列記した可能性がある。また6行目に見える「廿」が数量を示すと理解すると、その上の「佐羅」は物品名であると推定され、平城宮墨書土器や正倉院文書中に見える食器名である「佐良」と音通することから、5行目を同様に物品名＋数量と理解[28]し、最終字を「百」と推定する。このようにとらえることが可能であれば、刻書は儀礼行為に伴う供献物のリスト（平瓶そのものも供献物として理解できる）として製作され、用いられたものと理解しておきたい。

4．おわりに

本資料については、日本海文化研究所（富山市）の顧問を務められた門脇禎二氏により「今なお心残りで気に懸かっている一つの資料があります。（中略）何よりもわたくしは「与野評」へら書き須恵器片が、今日に至るその資料価値も、たとえば上記したような歴史的意義付けをめぐるような考

察を経ないで放置されたままなのが残念なのである。」と半ば叱責にも似た一文[29]をいただいている。発掘調査より31年、そしてこのお言葉をいただいてから8年もの歳月が流れてしまっている。その間にも7世紀代の出土文字資料は増え続け、今となっては本須恵器の資料価値もさほどないのかもしれない。遅きに失した感のある拙論ではあるが、これを期に7世紀代をめぐる北陸地域の議論の一助となり、門脇先生の宿題にお答えできればと考える。諸賢の検討を俟ち、擱筆することとしたい。

本稿を成すにあたり、本資料の観察に誘いをいただいた石川県教育委員会文化財課の伊藤雅文氏、那谷金比羅山窯跡須恵器について教示を得た当センターの川畑誠氏、釈文の検討に助言をいただいた明治大学吉村武彦教授を始めとする明治大学古代学研究所の墨書土器データベースプロジェクトチームの諸氏に謝意を表したい。

[註]

1 伊藤雅文2008「北陸の横口式石槨」 同「古墳時代の王権と地域社会」第5章第3節。

2 望月精司2005「古代の江沼を考える」「石川考古学研究会々誌」48号

3 破片を実見したところある程度接合が進んだ状態から注記が行われたようで、どの地点から主体的に出土していたかを検証することはできなかった。

4 報告した川畑誠は、窯体につかず、かつ変遷を追いにくい器種であることを断りつつ、10号窯併行段階に位置づけられるのではないか、としている。

5 北野博司1992「蝦夷穴古墳出土土器の編年的位置」 蝦夷穴古墳国際シンポジウム実行委員会「蝦夷穴古墳国際シンポジウム　古代能登と東アジア」

6 北野、望月ともに立評を孝徳期朝の斉一的な実施と理解し、この短書平瓶の実年代を7世紀中頃と見る。本稿では、土器の型式学的に7世紀中頃とみて可能かという立場上、「評」字をもって7世紀中頃とする見方については留保しておきたい。後述するように、文献史学の立場からは鎌田元一・森公章氏等の論から現在では孝徳朝期の全国一斉立評が有力な説となりつつあり、両氏の年代観を否定するものではない。また本短書平瓶を紹介する際、江沼臣（江沼国造）と当時の畿内王権との密接なつながりを示唆する（立評が他地域に比べ早かった）事例として挙げられることがあるが、現時点では立評の時期を示す考古学的資料としては最も古い時期に属する資料としてみるべきであろう。

7 奈良文化財研究所2009「木簡画像データベース。木簡字典」

8 早稲田大学図書館　古典籍総合データベース「法隆寺金堂金銅薬師如来坐像光背銘」画像（使用許諾17-231号）

9 木簡学会編1990「日本古代木簡選」

10 奈良文化財研究所2006「評制下荷札木簡集成」

11 浜松市教育委員会2008「伊場遺跡総括編（文字資料・時代別総括）」

12 おそらく人名「佐羅女（さらめ）」を意識して「女」としたのであろう。

13 註10文献

14 和銅6年の地名表記公定以降、公文書等に見える記載はすべて「江沼」で統一されている。例えば「越前国江沼郡山城郷計帳」や秋田城出土の死亡帳断簡（第16号漆紙文書）など。

15 「日本書紀」 欽明天皇31年四月乙酉条、また「古事記」 孝元天皇条に「江野財臣」が見える。

16 平凡社1991『日本歴史地名大系第17巻　石川県の地名』

17 角川文化振興財団1999『古代地名大辞典』

18 櫛木謙周1992「第4章第1節　律令制地方支配の成立」「福井県史　通史編Ⅰ　原始・古代」福井県

19 鷹巣純1966「継体天皇の系譜について」 「学習院史学　五」、1972「継体天皇の系譜についての再考」 坂本太郎博士古稀記念会編『続日本古代史論集　上巻』

20 財石川県埋蔵文化財センター2001「加賀市松山C遺跡」。本報告では、遺跡地を「江沼郡関係の官衙もしくは、江沼臣氏の居宅」と推定する。

21 鎌田元一1977「評の成立と国造」「日本史研究」176号。評制の研究史と問題点については、山尾幸久1991「評の研究史と問題点」「日本史研究」341号が的確に整理する。最新の評制の一般的な評価は市大樹2014「大化改新と改革の実像」「岩波講座日本歴史　第2巻」が手堅く論述する。近年鎌田の説く大化5年全国建評説に依拠しながらも、大化2～3年前後の先行建評の存在を指摘する研究もある。須原祥二「評制施行の時期をめぐって」 同「古代地方制度形成過程の研究」第2部第2章。

22 門脇禎二2006「祝、富山市日本海文化研究所設立20周年－心残りな一資料－」「富山市日本海文化研究所報」第37号

23 所収文献は次のとおり。評制下木簡の分析については註10文献が詳細に論じており、そちらを参照されたい。
①石川県立埋蔵文化財センター1989『那谷金比羅山古墳　那谷金比羅山窯跡』
②松山市教育委員会2009『久米高畑遺跡　1次・7次調査　政庁の発掘調査2』
③伊藤純1983「岡山県立博物館蔵の須恵器銘「馬評」について」『古代文化』35巻2号
④安中市埋蔵文化財発掘調査団2005『植松・池尻遺跡－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
⑤奈良国立文化財研究所1993『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』
⑥奈良文化財研究所2001［奈良文化財研究所紀要2001］
⑦川崎市教育委員会2014『神奈川県川崎市　橘樹官衙遺跡群の調査－橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書［古代編］－』
⑨柏原市教育委員会2011『島坂寺跡発掘調査報告書』
⑩奈良国立文化財研究所1978『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』

24 註1文献。伊藤は金比羅山が窯→古墳に変わる流れの中で行われた、窯生産途絶のための祭祀行為に伴うものととらえている。5～6行目を「阿波田直佐羅女」と読んで人名と解釈し、畿内に多く分布する粟田直氏が須恵器生産を担っていた可能性を指摘しているが、直と取ることは難しいことは前記したとおりである。なお本平瓶の詳細観察には伊藤も参加しており、氏も直と取り難いことについては賛意を示している。

25 註2文献。

26 望月精司の教示による。望月によれば平瓶は酒器としての性格が濃厚であり、提瓶から形態変化するこの時期の最新的な器種で、特別な意味合いがあるとする。

27 栄原永遠男2008「歌木簡の実態とその機能」『木簡研究』第30号

28「有」ないし「百」いずれをとっても、「阿皮田」が何を指すのか不明であり、筆者に定見がない。阿皮田□を人名とみて「佐羅廿」の貢納者とみる余地はなお残っている。

29 註22文献

石川県埋蔵文化財情報
第38号

発行日　2017（平成29）年12月25日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
URL　http://www.ishikawa-maibun.or.jp
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター